テキスト集

りらいず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テキスト集

【コード】

N60040

【作者名】

りらいず

【あらすじ】

詞でもない、小説でもない。いろんな「ひと」の日常を書いています。

朝

朝という日常のなかで一番だるい時空に私はいた。

今日も相変わらず鳥が私を支配する

きっと明日も私は同じ事を思い

明後日もきつと・・・

テレビからは涙を誘うドキュメンタリー

窓から顔を覗かせるとヒステリックなおばさんが布団を叩いている

どうやら、向かいの家の住人に「引っ越せ!」と騒いでいるらしい

「貴方が一番、騒がしいんですよ?」と言ってしまいましたかった

さて、そろそろ出掛けないと

上司に余計な小言を言われる前に・・・

「行ってきます」

誰も居ない部屋に私はそうつぶやいた

朝（後書き）

人生にちょっと疲れ気味のOLをイメージして

懲りない男

「あなたなんて、大嫌い」

「お父さんなんて、顔も見たくない」

・・・私は、『今の』妻と結婚して5回目の浮気をした。

妻はついに我慢が限界を達したようで、有名な弁護士を引き連れて離婚裁判を起こすとか

今年で16になる娘には着信拒否をされている

周りの人間は「どうして懲りない？」と聞くが

正直、その答えは私にもわからない

ただ、私は妻を愛していた

同時に、娘も愛していた

それだけは確かなことだ

そして、私が彼女らを裏切ったこともまた、「確かなこと」なのだろうか

一体「確実」とは、どんなものなのだろうか？

愛は確かにあった、だが私はそれを裏切った

何が正しくて、何が間違いなのかわからなくなった

今日は、妻との離婚協議の日

5ヶ月ぶりに妻と娘に会う

もったも、私にはもう新しい「妻と娘」候補は居るのだが・・・

懲りない男（後書き）

本能に逆らうってのは、悪い事じゃないですよ

ただ・・・この人は酷すぎです。笑

聖職者のきまぐれ

「あのねえ……どうやってたら6点なんてとれるの？」

「知るかよ……お前、もっと簡単なテスト作れよ」

「ちょっと！もう『再々再々テスト』なのになにが『簡単に作れよ』よ……」

私は、xだらけの真つ赤なテストを机に放った

彼は、きつとちゃんと真面目にテストを受ければかならず良い点を取る

私はそう確信していた

だからこそ、こうして『再々再々テスト』を受けさせている

高校の数学教師になって2年目の春。早くも問題児にぶつかった

中間テストも、期末テストもすべて赤点。

何度補習をしても、気がついたら寝てしまっ

必ず、この子は出来るのに……

「あのね、『sin60°』の答えがなんで『さいんろくじゅう

ど』なのよ!」

「え?これ読み方を答える問題じゃないんすか?」

「当たり前でしょ!そんなのサルでも出来るわ!」

「へえ、サルつて二ホンゴ出来るんですか、初耳」

「揚げ足取らない!」

「あ、すみません。答えに『いこーる』が抜けてましたね」

「そういう問題じゃないっ!」

この半年で、教師達の努力の末。彼の赤点はなくなった

・・・私が担当する数学を除いては

「あのさ、国語も英語も理科もゼーんぶ100点とれてるのに、なんで数学だけ6点なわけ!？」

「なんでだと思っ?」

「なに?何か理由でもあるの!？」

私は、自分の教え方が悪くないかを頭の中で確認した

彼以外の子たちは、平均点ちよつと上をキープしている。

生徒達も私に親切に接してくれているし、何も問題は無いはず・・・

そう思いを巡らせていると、彼は私の方に顔を近づけてこういった

「……あなたとマンツーマンで補習受けたいから」

「……………え？」

「さて……『再々再々再テスト』期待してますよ、鎌田センセイ
？」

「え……あ……はい……」

彼は、いたずらそうな笑顔を浮かべて、教室を去っていった

再々再々再テスト……難しめに作っておこうかな

聖職者のきまぐれ（後書き）

なんかベタ過ぎましたね、スミマセン（ノーク。）

殺人者の憂鬱

・・・小鳥が、やけにうるさい
陽の光が激しく照らす・・・

・・・俺は酔いつぶれて寝てしまったことを今自覚した

「もう、朝か・・・」

誰も居ない部屋にそう呟いて、俺は身体を伸ばした。
ソファの上で寝ていたので、かなり身体がだるい

俺は、今日のニュースを見るため、テレビをつけた

ぱつちりメイクを決めた女子アナウンサーが深刻な顔を作って原稿
を読んでいる

「では、続いているのニュースです。今日未明、すぎなか××市在住の杉中あおい
さんが殺害されているのが市内の路上で発見されました」

俺は、飲みかけていたコーヒーを置き、そのニュースに聞き入った

「杉中さんは、昨夜7時前後に、杉中さん宅で殺害され、路上に放
置されたと警察は判断して、捜査をすすめています」

ほう・・・警察はそんなところまで感づいているのか。と、俺は感
心した

．．．．．そう、碧を殺したのはこの俺だ

俺と碧は元恋人同士だが、俺は碧のことが諦めきれなかった。

だから昨日、碧のマンションに乗り込んだ、復縁を迫るために

すると、碧は俺に台所の包丁を向けてこう言った．．．

「これ以上つきまとうと、殺すわよ!」

『つきまとう』．．．俺はただ、碧のことを想っているだけなの
に

．．．．．気がつくくと、俺は碧から包丁を奪い取り、碧を刺して
いた

……このままでは、俺が疑われる

そう思って、通り魔の犯行に見せかけるため俺は、碧を路上に棄てた
しかし、やはり出血の量とかで、すぐにわかってしまうものなのだ
ろう

俺は今更に、自分の無能さに気付いた

「……………あつ！待ってください。臨時ニュースが入った模様
です」

と、アナウンサーが拍子ぬけた声が聞こえたのは、俺がそんな考え
をしているときだった

「え……………先ほどお伝えした事件に進展があった模様です。現場
の亀田さん！」

と、どこかの警察署内に中継が繋がった

「はい、亀田です！えー、先ほど杉中さん殺害の件で、ある男が自
首をしてみました」

……………なんだと？

そんな筈はない。碧は俺が殺した。他に犯人など……

「えー。男の名前は高藤^{たかふじ} 雅人^{まさと}32歳。フリーターです」

高藤 雅人……俺はその名前を知っていた

まだ碧と付き合っていたころ、碧に「ストーカーにつきまとわれている」と相談を受けたことがある

その男が高藤 雅人……以前碧と付き合っていたが、碧に別れを告げられ、その後ストーカーになったとか

「えー。我々は、自主前の高藤さんの取材に成功しました」

と、画面は切り替わり、どこかの喫茶店が写った

マイクをもったレポーターと、高藤がいる

「なぜ、杉中さんを殺害したんですか？」

「僕は……碧を愛していた。それだけだ」

高藤は、そういつて含み笑いを浮かべた

俺は直感した

高藤は、自分が『殺したことにしたい』のだと・・・
『碧を愛していたから、殺した』という自分勝手なストーリーを作
っているのだと

・・・ふざけるな

碧を殺したのは俺だ

愛していたから殺したのは、この俺だ

憎き殺人者は・・・この俺なのだ

殺人者の憂鬱（後書き）

これを書いててダチヨウ倶楽部を思い出しました。笑

犯罪者と疑われなくなかった男ですが

いざ「自分が殺した」という人間があらわれると

「殺したのはこの自分だ」と名乗りたくなってしまう

そんな醜い愛憎の連鎖でした、では。

笑顔の裏側

「それじゃあ！今日の『わらってにこにこあつぶつぶ』はここまで。ばいばい」

と、俺が愛想良く手を振ると、監督から「OK」の合図が出た

「お疲れ、よしひろお兄さん。今日もなかなかの笑顔っぷりだったよ」

と俺の肩をたたく

「そうですか！ありがとうございますっ！」
と返事をする俺は楽屋に戻る。

「・・・あー疲れた。あーうぜえ」

楽屋に戻ると俺はそうつぶやいた。

オコサマ向けの教育テレビに就職したはいいものの

急遽「お兄さん役」の奴が出られなくなって、俺が代役を務めることに

正直、ガキは嫌いだ

ぎゃーぎゃー騒ぐし、大人の言うことはまともに聞かないし（おっと、これは大人にも言えることか）

しかも、この番組に出ることになって、恋愛がNGになった。

よって彼女と別れる・・・というか、番組が終わるまでの期間限定の破局になったが

その間に彼女が別の男に惹かれる可能性だってある。

このクソ番組のせいで、俺の人生めちゃくちゃだ

そのとき

コンコン・・・

ドアをノックする音が聞こえた

「あつ、はい!どうぞ」

俺は再び「よしひろお兄さん」の顔に戻ると、そう返した

「失礼します・・・」

その部屋に入ってきたのは、同じ(クソ)番組に出演している「まゆこお姉さん」

「真由子さん。どうしたんですか?」

俺がそう聞くと、真由子さんは手に持つてるバッグからあるものを広げた

「ちよつと・・・ここでお酒飲んでいい?」

そのあるものとは、ビールやら発泡酒やら、様々な酒類だった。

「え?いいですけど・・・なんでここで?」

「えつと・・・今マネージャーさんが楽屋に来てて・・・あまり飲みにくくて」

だからといって、「お兄さん」の部屋に来るのもどうかと思うが・・・俺がそう言おうとしたとき、真由子さんが顔を赤らめながらこついたりした

「それに・・・よかつたら佳宏さんとお酒飲みたいな・・・って」

「え・・・」

・・・子供番組も、悪いことばかりではないようだ。

笑顔の裏側（後書き）

ちよつとマニアックに「教育番組に出演するお兄さん」を描きました。笑

十字架の行方

私は、この道30年の警備員だ。

実は、キミに相談したいことがあってだな・・・いいかね？

私の会社はご存じの通り派遣会社に似ている。

「この道30年の警備員」といつても、あるときはちゃらちゃらし
たバンドのライブの警備
またあるときは、お高いものが集まっている美術館。

私は、この30年で様々な場所で警備をしていた。

・・・先月、私はあるデパートの駐車場の警備を任された。
車を誘導したり、デパート内の客の案内をしたり、容易い仕事だっ
た。

ところが、そのデパートで警備をしてから2週間。事件は起こった。
・・・なんだか、私が探偵でキミに推理を聞かせるような気分にな
ってきたよ。

おっと、失礼。話が逸れてしまったな。

その日、私はいつものように駐車場で警備をしていたんだが

ある、一人の5歳くらいの男の子がさつきから20分も駐車上をうろろろしていたんだ。

警備員の勘というやつか・・・私はこの子がすぐに迷子だとわかったよ。

何度も車を探しているし、とても悲しそうな顔をしていたからね。

「迷子のお客様がいらっしやった場合、地下駐車場のエレベータを使い1階に上り、サービスカウンターに預ける」というマニュアルだったので、

私はその子供に声をかけたんだ

「ぼく。もしかして迷子なのかな？」

私は精一杯の笑顔でその子に話しかけたつもりなのだが

その子の顔はみるみるうちに青ざめていったね

おびえた顔をしながら首をぶんぶん振って「違います！」と声を張り上げたんだ。

「でも僕。さつきからこの・・・えー、駐車場。ずうーつとろろろしていただろう？迷子だよな？」

あと10分で休憩時間に入るということもあり、私は早くその子をサービスカウンターに預けたかった

だが、その子は何度聞いても「迷子じゃない」と首を横に振るだけだった。

いよいよいらついできた私は「じゃあ、なんでお父さんやお母さんが一緒じゃないのかな？まさか一人で来た訳じゃないだろう？確かにはぐれてしまったのは僕の責任かもしれないけど。はぐれてしまったものははぐれてしまったもの。過去はふり返らないで、おとなしく迷子を認めようよ？僕、男だろう？」と、たたみかけた。

・・・ふっ、今思い返すとこんなちっこい男の子になんて言い方だと反省してしまうよ。

すると観念したのか「わかりました」と小さくうなだれ、私について行くそぶりを見せた。

だがそのとき、私にこう聞いたのだ

「殴らない？」・・・とね

私がどうして？と聞くと「だって、迷子になっちゃったから」と涙をぼろぼろこぼし始めた。

そのとき私は、子供っつーもんはどうしてすぐ泣くんだと呆れていた。

だから詳しくは聞かず「あー殴らないから、涙拭いて。ほら、サービスカウンターでお母さん呼び出そう」とその子を半強制的に引っ張った。

サービスカウンターについても、その子はまだ泣いていた。
カウンターの店員に事情を話すと、その子に名前を聞き、放送をしてくれた

ピンポンピンポン

「・・・結城 勇気くんのお母さん。結城 勇気くんのお母さん。

勇気くんがお待ちです。1階サービスカウンターまでお越しください」

ピンポンピンポン

結城 勇気という名前に私は笑いそうになってしまったよ。
名字と名前をかけたつもりなんだが、まあつまらない。
キミもそう思うだろう？

それから10分後、母親はやってきた。

母親は勇気君を抱きしめると「迷子にさせてしまっでごめんなさい」と涙を流した。

それから涙をぬぐって「本当に、ご迷惑をおかけしました」と丁寧にお辞儀をして

勇気くんと手をつないで帰って行った。

私は忘れないよ、そのとき勇気君がとても怯えた顔をしていたのを

・・・殺されたんだよ、勇氣君。その数時間後
死因は、内臓の破裂による失血死
・・・原因は母親の家庭内暴力だそうだ。

前々から、母親の暴力は盛んにあったらしい。
今思い起こせば、そういうえば勇氣君の腕には数力所あざがあった。
どうして早くに気づいてあげられなかったのか・・・

しかもだ。警察の取り調べに母親はこう答えているのだそうだ。
「デパートで迷子になって、挙げ句の果てに放送で私の名前を呼び、
私に恥をかかせたから、腹を蹴ったらあっけなく死んだ」と・・・

・・・キミに相談したいこと・・・だいたい想像がついただろう？

・・・そうだ。私が勇氣君をサービスカウンターになんか連れて行
かなければ
彼は死なずにすんだのだよ。

私は一体、どうしたらいいと思う？

一生、この十字架を背負って生きていかなければならんのか？
・・・今日、会社に辞職を命じられたよ。
どっかのゴシップ雑誌がこのことをとりあげ、私をバッシングした
らしい。

私はいまや、定年寸前にリストラされたただのおじいさんというわけさ。

なあ、君よ。

私はこれからどうすればいい？

一生この『罪』を背負うべきか？

それとも、何事もなかったかのように、すべてを忘れてのんびり年金暮らしをするべきか？

なあ、我が友よ……

私の十字架は、どこへゆけばいい……！

十字架の行方（後書き）

コナンの映画「漆黒の追跡者」を見て思いついたネタです。

あの、ベルモットが警備員に向かって「この子迷子みたいなんですけど」ってやつ。笑

子供としては、自分が迷子だって、認めたくないですもんね。
必死に否定してしまうのは当然だと思います。

だからって、この警備員はなんの罪も無いまま生きていて良いのでしょうか
ってな感じの小説でした、では。

おつかれさま

お疲れ様ってすごい相手を気遣う言葉なんだって

だってさ、「疲れ」に「お」をつけて、「様」までつけるんだぜ

・・・ってなんかのCMでやってた

っーかね、俺だってねぎらいたい人はいるよ

ま、誰かとはいわないけど

ねえ、今外見える？

星、綺麗だろ？

こんなに見えるのはすんげー久しぶりじゃね？

ほら、おまえが「満点の星を見たい！」って駄々をこねて

近くの山に登って見た日以来って感じ

・・・え？わりーわりー！

確かにあの日の星の方が綺麗だったって、だからそんな怒んなよ

・・・は？

いやいやいやいや！「お疲れ様」と「お星様」はかけてねえーよ
ってか俺言った？お星様って！

おまえと違って、んなロマンチックじゃねーし。

でも、悪くないと思うけど、おまえのそーゆーとこ

・・・ってか、え！？もう0時かよっ！！！！
年あけちまったじゃねーか。

え、なに。こんな電話をしてる最中に年号変わったんかよ！！
ウケるわ・・・まじうける・・・

あ、明けましておめでと。

いちおー言っとく。おめでたい日だし

・・・おまえに最初に言えてよかった。

ん？いや、何にもいってねーよ。

・・・だから「疲れ」と「星」はかけてねえーって！！

おつかれさま（後書き）

年明けを迎えた、幼なじみ同士の電話にて。

最近暗いのばかりだったんで、少しポップにしました

死刑宣告

「こんにちは！」

・・・道を歩いていると、突然知らない少年に声をかけられた
最初は人違いかと思い、素通りしようとしたけれど

「あ、まってよなぎさ！」

と、私の名前を呼ばれてしまったので、仕方なく立ち止まった。

・・・実は今めちゃくちゃ忙しいのだけれど。

上司に提出するはずの書類をどこかに落としてしまったのだ。

もうすぐ出社時間。

いちおう、会社には「遅刻する」と連絡を入れた。

それだけで上司はキレる寸前だったので、書類をなくしたなんて今
更言えない。

下手したら減給・・・もしかしたらクビ・・・!?

3年つとめてようやくつかんだ地位をはなしたくはない

だからこそ、私はなんども道を行ったり来たりしているのだ。

だからこんな少年の相手をしている時間はない

「な・・・なんですか？」

私はぶっきらぼうにそう訪ねた

「まあまあ、そんなに怒った顔しないで」

と、少年は笑顔を見せた

・・・よく見ると、かっこいい。

「……いやいや、そんなことを考えている暇はない
早いところあしらって書類を……」

「これ、落とさなかった？」

私がお礼を言おうとしたとき、少年は1冊の封筒を差し出した
「……それはまさしく、私が探していた書類だった。」

『軽くあしらおう』なんて思考は消え、私にはその少年が神に見えた

「あ……はい！そうです！ありがとうございます」

と、私は精一杯の感謝の気持ちを伝え、封筒を受け取った

「どういたしまして……」

と、少年は残念そうにつぶやいた

そしてもう一度私がお礼を言おうとしたとき

「……本当は、渡そうかどうか迷ったんだけどね」

と、少年がつぶやいた。

「……え？」

不可解な発言に、理由を聞こうとしたが

それより先に少年が答えてくれた。

「……だって、なげさ。あと34秒02で死んじゃうんだもん」

……顔が整った顔は、本当に残念そうな顔をしていた

冗談じゃない。

いきなり現れて、私の名前を知っているし、死ぬだなんて……

私は少年の不可解な発言にいらだち、こう言い返した

「あのですね、この書類を拾ってくださいったことは感謝しています。でもいきなり死ぬだなんて失礼ではないですか？だいたいあなた一体何者……」

……これ以上、私の言葉は続かなかった

……なぜなら私が口を開いている時、頭上から大きな四面体のコンクリートが落ちてきて、私の頭に見事直撃したからだ

「ばいばい。なぎさ」

少年は明るい顔に戻して、手をひらひらさせていた。

死刑宣告（後書き）

テキスト集のなかで、一番意味不明なのができあがりました。笑

嫌われ者の優美

「さあ、言いなさい。犯人は貴方なんでしょう？」

・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、快感だ

この言葉を発している瞬間が、人生の中で一番心地良い時間だ。

そもそも、私はこのセリフを言うために刑事になったといっても過言ではない。

『刑事ドラマのよくあるオチ』・・・・・・・・これを私は欲していた

しかし、世の警察上層部のバカどもは私を生活安全課へと追いやった。

ただ1回！ただ1回のミスによって！！

たった1度、私の推理が誤っていて・・・・そのせいで容疑者が自殺したくらいで！

それだけでバカどもは私を捜査一課から生活課へと！！！！

生活課の仕事は本当に退屈だ！

相談に来るのは決まってストーカーだの防犯対策だの私の欲求を満たしてくれるものなどない！

しかし・・・1週間前私は興味深いことをある女性から聞いた

その女性とは生活課へストーカーの相談にやってきた人であった。

「元彼につきまとわれている。どうかしてほしい」といった相談内容だった

私はいつも通りテキストにあしらった・・・

ところが・・・その翌日。その女性は殺された

私も、その女性が前日相談に来たということもあって、現場にたちあつた。

・・・とても美しい亡骸であった

鋭い刃物のようなものでいろんな箇所をずたずたにされていたのだ。久しぶりにみた死体に、私はつばを飲み込みそうになるのを押さえながら

刑事たちに前日の女性の様子を伝えた。

それから私は、そのストーカーについて懸命に調べた。

・・・もちろん、「あのセリフ」を言うためにだ

捜査一課に先を越されたらいけない。

私は、捜査一課のデータベースをハッキングし、捜査資料を念入りに読み込み

独自の捜査を延々行つた

・・・そして、ようやくたどり着いたのだ
私が愛してやまない犯人を！

おそらくそのストーリーカーはすぐにこう言うだろう

「ごめんなさい刑事さん！僕の負けです！！」

「いえ、違いますよ」

その醜い顔をした男は予想外の答えをしめした

・・・バカな、私が間違えた？

そんなはずはない。この男にはさっきから私の調査結果を十分説明した

理解できないのだろうか、私の説明に。

とことん使えない男だな

・
・
・

「たしかに僕は、美衣みい乃をストーカーしていた。ああ、認めよう。」

「美衣乃が僕より別の男を選んだからね」

「しかしね、君は刑事だろう？聞いてないのかい」

「犯人はもう、捕まっただよ？」

・・・ストーカーはそうまくし立てた

はんにんがつかまった・・・？

「たしか、犯人は美衣乃の妹・・・稀衣乃だったはずだ」

「まったく、姉を殺すとは・・・とんだ妹だ。前々から変わった娘だとは思ってたが・・・あれほどまでとは」

私が・・・間違えただと・・・

冗談じゃない。こいつが絶対に犯人なんだ

妹？そんなことは資料に書いてなかったはずだ

1日、2日で妹が捜査線にあがったというのか！？

フザケルナア……………

「おい、おまえ」

私は、ストーカー男の胸ぐらをつかんだ

「な……なんですか……?!」

「どうして……」

「え？」

「ドウシテ、オンナヲ、コロサナカッタ……?」

嫌われ者の優美（後書き）

「あたしのお姉さん」の別視点ストーリーです

こんな刑事いたら怖いです。笑

自覚ナシ

思っただけだね、あたし

「あいさつ」「ってとつてもじゅーよーだと思っつ。ねえ？

何気ない「こんにちは」で仲良くなっちゃうこともあるんだし
ちよつとしたことでの「ありがとう」がもんすごく人を癒してくれ
ることだつてある・・・

そつでしよう？ねえ、正論よね？ね？

ほらみなさい、あたしは正しいじゃない。

え？まだわからないの？？はあ・・・
なんかさあ、あたしつてほんとふこーなニンゲンだと思わない？ね
え？

誤解なんだつてさ！ねえ？わかつてよ

検事さんだつて、誤認逮捕・・・じゃなくて起訴したくないでしょ
ー？

いや、わかつてる！わあーつてるわよ！

確かにあたしは殺しました。ええ、殺しましたよ！人をね、はい！
まずそれは置いてごう。ね？

でもね、あたしもね、ええ、ある意味さ、被害者なのよ？

あたしはただ、夜道をだらしなないカツコーで寝てる女がいたからさ
親切に、親切にだよ？「こんばんは、大丈夫ですか？」って声かけ
てあげたんだよ

そんな優しい人そういないでしょ？あたしは優しいんだって！

そしたら、その女がむくりと起き上がってさ！

「気安く話しかけんな！このババア！！」って！！

もう、あたしったら悲しくって悔しくって！！！！

なにさ、あたしはただ親切に声かけただけじゃないのさ！！！！
あたしがなににしたってんだい！！！！ねえ？

でね、切れたわけ

なにがって、あたしのカントンプクロ・・・じゃなくて・・・なん
だっただかしら

そう！堪忍袋の緒が切れたわけ！！ぶつつんとね。

「簡単袋」じゃ、そら切れるわって話よね！あっはっはっは・・・

で、何だったかしら・・・そう！それであたしキレちゃってね！
思わずその女の首をつかんでぐわんぐわん揺らしまくったのよ！

そしたら、なんか抵抗してた手がきゅーにぱたりと地面に落ちてね

死んでるってのがわかったんだけど・・・

でもさ！あたしはよかれとおもってその女に声かけたのに
なーんであたしが殺人者としてこおーんなせまっくるしいところに
いなきやいけないわけさ？

あたしは、ただの「善良な市民」よ？
ねえ、あたしを起訴できる？検事さん？

自覚ナシ（後書き）

「自分が正しいことをしている」と誤解してるときの人ってある意味怖いですよ

伝えようと伝えようと必死になるから、より怖い。

いきちがい

「ねえ、ぱぱ。これからどこにいくの？」

「どこって。おばあちゃんだよ」

「おばあちゃんち？だってこのまえいったばっかじゃん」

「そうだね。でもね、どうしても行かなきゃいけないんだ」

「どうして？」

「ぱぱ達にはそこしか居場所がないからだよ」

「なんで『いばしょ』がないのお？みみ、おばあちゃんちいかないとしんじやうのお？」

「ううん！美実みみはとっても良い子だから、死みなないよ」

「じゃあ、あ、どつうして？」

「それはね・・・」

「あれ？ねえねえぱぱあ。ママはどこにいったの？」

「え・・・！？」

「もしかしてぱぱとママいつもけんかしてるから、おいってきたのお？」

「え……えつとね……それは……」

「あれ！ぱぱのこーにあかいくれよんがついてる！」

「っ……！？」

「おえかきしてたんだ。だめよ、こーとよごしちゃ……」

「……」

「どうしたの、ぱぱめ。さっきからだまって……」

「……美実」

「ん〜？」

「……じめんな」

「えっ？」

・

・

・

・・・

あ？もしもしい。智聖ちせい？

あたしあたし。みみ！

え、いま？・・・ド田舎なう。

父親に連れられてここまで来たんだけど・・・
ちよつと聞いてくれるう？マジつける話！

今朝ねえ、みみが起きてきたら・・・

父親が母さんの首しめて殺してんの！マジつけるっしょ！
あたしもビックリしちゃってさあ、部屋に戻るうかと思ったんだけど。

父親がこっち向いてきたの。マジもう死ぬかと思って。

それでそれで！

あたしいつもとーり赤ちゃん言葉で「ぱぱ、おはよう」って言ったの
そしたらあいつ凶器のロープ後ろにかくして「あ・・・ああ、おは
よう」とか言ってくるし。

え？智聖知らないっけ？あたしの父親、あたしを幼稚園児だと勘
違いしてんの。

ただのキチガイ。脳がぶつとんでんじやない？

だからね、いつもあたしに赤ちゃん言葉で話してくんのお！
ウケるっしょ？あたし今年で17よ？つてあんたも同じか！

だから母さんと相談してあたしも父親の前では「幼稚園児」として
生きてたんよ？

え、知らなかった？ってかあたしが話してないだけか。ウケる

あ、話の続きね。母さん殺してるところあたしが見てないとも思ったのか・・・

急に「出かけるから、準備して」とかほざくのお。

しかもその間も「くつしたはいた？」だの「いつもの魔女っ子ちゃんのバッグ持った？」とかうぜーことばかり言ってくるし。

で、とりあえずここまで来たんだけど

どーやらあいつ、自分の母親の家に行きたかったみたいで！
どんだけマザコンなんだよって話。ははっ、ウケる。

マジうざいから隙を見て救急車と警察呼んだ後おちよくってやったの。

「あれあれえ〜？ぱぱのコートに赤いシミがついてますぞお〜？」
的なこと言っつて！

え？マジマジ！ガチ！あたし上手いっしょ？幼稚園児の演技

そしたらさ、あいつあたしの首もしめて来たんだけど、ウケるでしよー！

まあ、さすがにウザさマックスで、殺しちゃった。あのキチガイ

いや、あたしもガチやばかったから！死ぬかと思っただもん〜

ああ〜、智聖泣かないでえ！あたし死んでないからあ〜

え？死体・・・ああ、近くのゴミ箱に棄てといた
だつてえ、じゃないとあたし疑われるじゃ〜ん
ええ〜？智聖ひどい〜！あたしだつてそれくらいの賢さありますう！

・・・つてわけでき、智聖

今晚泊めて！一生のお願い

いきちがい(後書き)

行き違い

いいキチガイ

メインディッシュ「1」

『夫が殺された』

この事實は、あまり私を驚かせてはくれなかった。家族は私の肩を抱いて「かわいそうに」と連呼している。友人はまるで自分のことかのように泣きじゃくっている。（そこまで泣かれたら、私だつて悲しめないだろうに）

葬式でも、たくさんの人に「お悔やみ申し上げます」と言われた。こう、いろんな人にいわれると、改めて夫はあのひといろんな人に愛されていたんだと実感した。

しかし、先述の通り。私はこの事實に驚いていない。というよりか、『驚けない』のだ。

なぜならその事實を作ったのは私だからだ。

少し、夫との出会いを話してもいいだろうか。三年前・・・つまりは二十歳の時だが、私はシンガーソングライターをめざし、毎晩七時くらいに最寄り駅近くにあるベンチに腰掛け、ギターを弾き語りして・・・いわゆる『路上ライブ』を行っていた（今となっては恥ずかしい思い出なのだが）。

もちろん、私の歌に耳を傾けて止まってくれる人などいなかった。皆、暖かい家庭があるからだろう。私には当時『家庭』などというものはなかった。だからこそこうして歌っていたのだが。両親は離婚し、すぐにどちらも他界し、私は親戚の家をたらい回し・・・もう自分の苗字が何回かわったことやら。

ところが、寒い冬のある日、私がいつもどおり七時から歌い始めると、私の歌を立ち止まって聞いてくれていた青年が居た。私が歌い終わると、「お上手ですね」と、一人で拍手までしてくれた。

言わずもがな、それが今の夫だ。

それから青年は毎日私の歌を聴きに来てくれて、時には歌い終わると一緒に長話をしてしまったり。電話番号を交換した夜には、私の家族についての相談を受けてくれたり。お互い会社が休みの日には一緒に出かけ、買い物をしたり・・・

いつからだっただろうか。私たちの間柄は『恋人』と呼ばれるものになっていった。

彼という守るべき物（または守られる自分）が出来てから、私は現実を見つめ直すようになり、歌手の夢はあきらめ、仕事を一生懸

命するようになった。

そのとき彼は「亜紀帆あきはの歌声が聞きたいな」と、そのことに反対したが、二人が同居するという話が出来てからは、勢力もだんだん弱まっていった。

彼と同棲して数ヶ月、私に子供が出来た。彼はとても喜んでくれた。「仕事も今の倍以上働いて、亜紀帆と子供を幸せにするから、籍を入れない？」と、プロポーズまでされた。

思えば、その頃が一番幸せだったのかもしれない。と、今実感する。

さて、『彼』が『夫』となつて2ヶ月。お腹もだんだん膨らんできた頃。彼に頼まれて壁に掛かつてあるコートからライターを取り出すため、ポケットの中を手探りしていたら、ある伝票が出てきた。そこには桁違いな数字が書かれていて、商品名には「perfume」と書かれていた。

そのときは、何にも思わなかったのだが、一週間後、夫が近くのコンビニに買い物に行っている際、何気なく着信がした夫の携帯を覗いたら、私がいらない女性から、メールが来ていた。

それは、妙にデコレーションが凝っているメールで「この前は香水のプレゼントありがとでした（*^ ^*）また何かあったらいつでもどうぞ」という内容だった。

ああ、そうか。これが不倫なのか。と、私は感じたことのない虚無感を感じてしまった。

夫がコンビニから帰ってきたので、私はメールを開かずに画面を待ち受けに戻し、夫がこちらに来ないうちに携帯を閉じた。

夫は、頼んでもいないのに私のために身体にやさしい食品を買ってきてくれていた。優しいのに憎い人。

……やはり、不倫が理由で夫を殺してしまつては、いけないのだろうか？

いままで信じ、愛し、子まで授かった存在なのに、この裏切られ方はどうなのだろうか？

私にとっては、その時点でその夫は「イキルカチナシ」なのだが・

……

そして、その翌日……つまりは昨日だが。夫を殺害した。……急すぎるだろうか

夕食を作っているとき、背後に近寄り「ねえ、メインディッシュ主食の味付けがあと一つ足りないんだけど、くれない？」と話しかけ、彼が「なに？」と振り向いたところを、「あなたのことよ」と囁きながら心臓近くを刺した。なかなかスリリングで良いだろうか？

彼も、誰に殺されたかわからず死ぬのはかわいそうだから、あの意味幸せな死に方だったのではないだろうか。

いずれにせよ、主食の味付けはあっけなく死んでいった。

メインディッシュ「1」(後書き)

なんか長くなりそうなので区切りました。

“生命”の誕生

現在時刻：午後11時25分32秒

たしかな時を告げている腕時計に、私はため息を漏らした。

結局、今日もまた残業をしてしまった。

今日こそは早く帰るぞ、なんて自分に言い聞かせながら定時に退社しようとしたのだが・・・

「ああ、間野^{まの}くん。ちょっと手伝って欲しい仕事があるんだが。」

などと、薄汚い野郎^{じょうし}の声が聞こえたので、私は現在まで会計の整理を手伝っていた。

これでその上司が「ありがとう」なんて良いながらご飯でもおごってくれたらこんなストレスはたまらなかったのだが・・・

「すまない、間野くん・・・娘が熱を出したようで・・・。今日は妻も家に帰らないから、私が面倒をみなきゃいけないんだ。悪いけど残りの仕事頼むね」

と、上司は約2時間前にそそくさと帰ってしまった。

今できあがったこの報告書をすべてシュレッダーにかけて上司の机に置けたらどれだけ清々するか・・・

左腕を高く伸ばしてみた

薬指には彼がくれた指輪が。

その“彼”も今どこにいるかもわからない。

ただ私と別れたかっただけなのかもしれないし、もしかしたら死んでいるのかもしれない。

残業のある日（つまりはここ最近・毎日だが）はそんな彼の事を想ってしまふ。

こんな気持ちを晴らしたく、窓際のデスクに置いてあるコーヒーマーカ―に手を伸ばす。

先週、部長がゴルフの景品だとかなんとかで手に入れたというこのマーカ―。

高級品なのか、味わいがとても深く、この子はかなりの人気を博している。

最近は毎晩、この子は私だけのもの。

安いカップに高級な飲料を入れ、ふと窓の外を見上げてみた。

今の私の心境とは対になる、綺麗な星空と満月だった。

感嘆の息を吐いてコーヒーを飲もうとすると、ふとあることに気づく

その黒いコーヒーに、窓から映し出しされている景色が反射しているのだ

まるで、私が入れたコーヒーに月と星が誕生したみたいに・・・

こんなちっぽけな私だが

“月”と“星”というとても美しい物を小さな聖域に生成出来たかと思うとなんとなくうれしかった。

小さな誕生を祝いながら、私は月と星を飲み干した。

“生命”の誕生（後書き）

柴田淳さんの「月光浴」・「HIROMI」を参考に。

正義「1」

ありつたけの力をおなかにこめ、私は叫んだ

「ねえ！どろしてよっ。どろして、どろして、どろしてえ！！」

・・・もう何度』どろして』という四文字を口にしたのだろう・・・

「みい」がこの家にやってきたのは、三ヶ月前の事だった。

その日は真冬だというのに土砂降りが続いていた。

私は、麻巳^{あそみ}ちゃんと遊ぶ約束をしていたのだが

母に「傘が壊れてしまうから、行ってはいけません」と、キャンセルせざるを得なかった。

幼稚園から帰ってきて早々そんな事を言われてしまったので

すっかり何もやる気をなくしてしまった私は、バッグを床に放り投げ、ベッドに飛び乗った。

毛布からは、おかあさんの暖かい香りがした。

が、今の私にとってその匂いは邪気そのものだった。

一階では母が、麻巳ちゃんの家連絡をしている。

いつもより数オクターブ高い声が聞こえてくる。

どうせまたいつもの「うちの友加^{ゆかり}璃がお世話になってます」という決まり文句を発しているのだろう。

どこからともなく・・・さしずめ私の口からため息が出る。

「いいもーん。ゆかり悲しくないもん。おにーちゃんに言いつけてやるもーん」

自らのため息をまるで言い訳するかのように私は独り言を呟いた

『おにーちゃん』とは私の十歳年上の兄・大空たいそくのことだ。

いつも私の事を気遣ってくれて、何より一番に考えてくれる自慢の兄だ。

・・・兄の二歳年上の姉・眞美まみこ子からは「シスコン」などと称されているが

とにかく、今日もそんな兄にかまってほしかった。

ところが、数時間後家に帰ってきた兄は、なにやら不気味な物体を乗せていた

「おかえりなさい。あら、一体なんなのですか？その薄汚い子猫は・・・」

玄関まで私と一緒にきた母がそういうまで、その物体がねずみ色をした子猫だということに気づかなかった

兄は酷く息を荒げていた

「はあ・・・はあ・・・み、道で倒れてて・・・はあ、かわいそうだったから・・・」

「まさか、そのまま連れて帰ってきたなどとは言いませんよね？」

兄の次の言葉がわかったらしく、母はそう、珍しく声を張り上げた

「はあ・・・御厨家^{みくじや}長男である貴方がなんとはしたない」
母はそう呆れながらため息を吐いた

私には、どうしてそれが『はしたない』のわからなかった。
瀕死の状態の小動物を助ける・・・どこにはしたないの『は』の字
があるというのか

「ねえ、おかあさん。かわいそうだよ。おふろにいれてあげよーよ」
このままではこの猫は死んでしまう・・・そう思った私は母にそう
懇願した

「友加璃。貴方までなんてことを・・・」
母が私をしっかりと受けようと息を吸ったとき、二階から姉が降りてきた

「なんの騒ぎよあ・・・あ、猫ちゃん。どうしたの？」
姉は猫の存在に気づくと、兄から猫を奪い取り、よしよしとなで始
めた。

「いけません！眞美子。そんな猫棄ててしまいなさい」
母はどうも猫が気持ち悪く見えるらしく、さつきからずっと眉間に
しわをよせていた

「なんでよあ。瀕死の猫を放っておくのが、御厨家のしきたりです

も言っの?」

姉はその猫が気に入ったらしく、母にこう反論した。
さすがの母も『しきたり』という言葉に弱かった

「わかったわよ・・・とりあえず、その泥やゴミやくずやカスを洗
ってしまいなさい」

母はまだその猫が気に入らないらしく、そそくさと居間に戻ってい
った

「よっし！姉貴ナイス!!」

この猫を拾ってきた張本人は、救済者に親指を立てた

「別にあんたのためじゃないわよ。ゆかちゃん、一緒に猫洗いまし
よう?」

姉は腕にしがみつく兄をふりほどくと、私にそう笑いかけた、私の
こたえはもちろんYESだ

こうして、兄が拾ってきた猫『みい』（名前は後に姉が考えた）と
の共同生活が始まった。

正義「1」(後書き)

もし幼稚園児が、こんな大人みたいな思想が出来たら、的な話。

なきむし

小学生低学年のころから「泣き虫」というあだ名をつけられていた。

とは言うものの、別に「何かあったらすぐに泣くから」という理由でつけられたわけではなく
ただ単に、目の下にほくろがあり「泣きぼくろ」から「泣き虫」に
転換しただけだった

そしてこのあだ名は、後にいじめへと発展していった。

中学生になると、私立に通うことになったからか、友人が大幅に変
わった

そして一部のクラスメイトから「泣き虫」と呼ばれている俺は、本
当の泣き虫と勘違いされ

「本当に泣き虫なら、それは改善しなきゃいけないな」

という理由で、陰口を言われるようになったり、教科書に落書きを
されたり・・・
拳げ句の果てには、家を燃やされた。

ん？やけに簡易に言うことにたいして疑問を抱いているのだろうか？
なあに。家の焼失など、教科書などの直接的攻撃に比べれば幼稚な
もの。

もちろん、そのとき家にいた両親・弟妹は皆死に絶えたが。

だがこの経験のおかげで俺は、今『殺し屋』という冷徹な心を必要とする職に就いている。

日本で『殺し屋』というのはあまり聞き難い職業であろう。

ところが、世界にはそれぞれの『お国柄』というものがあり、K国では殺し屋（K国でいう“終人”^{おわりひと}）の存在を黙認している。

時にはK国政府からの要請もあるほどだ。

俺は前述の自宅焼失から、施設に預けられ、そこで出会った紀興^{きこう}という男とその施設を逃亡し、行き先も知らぬ貨物船にもぐりこみ、K国にたどり着いた。

K国到着後、さっそく見つかった俺たちは、政府直属の終人として生活している。

・・・「政府直属」とついているかついていないかで、生活の裕福さが大きく異なるのは周知の事実。

現在は、政府のある裏切り者の始末を仕っている。

その裏切り者は、政府の人間でありながらも、政府の独裁政治を断ち切るべく、反政府側に政府の情報を漏洩させたとして、政府より死刑が下されていながらも脱走を試み失敗した男である。

・・・そう、おまえだ。紀興。

おまえは外国人でありながら終人の才能を称され、ついには外国人初の国務大臣にまでのぼったが、俺はおまえみたいに起用な人間ではなかった。

そんなおまえをついに殺す指令がくだされたのだ。

わかるな？おまえは亡命に失敗した。おまえはいまから殺されるのだ。

・・・何を泣いている？

旧友の俺に殺されるのが嘆かわしいのか？

・・・なに？「おまえも泣いている」だと？
そんなの、当たり前じゃないか

俺のあだ名は「泣き虫」なのだから。

なきむし（後書き）

泣きぼくろから政府の事情までたどり着いた意味不明なものになりました。笑

ナツカゼ

風邪をひいた。

32というこの年でもまさか風邪という病気にかかるなどとは思いませんでした。

とはいうものの、思い当たる節はある。

先日、今年で6歳になる息子がプールに入りたと言ったので、庭で家庭用のプールに水を入れ、夏だからといって私もつい入って息子と一緒に遊んだのだが

それが異様に気持ちよく、お昼から夕方まで、ずっと水の中に入っていたのだ。

そりゃあ、熱も出るだろうという話だ。いわゆる夏風邪だろうか

夫はもう会社に行ってしまった。今日は昼食は外で済ますと聞いていた。

息子は今日幼稚園をお休みした。うちの幼稚園はバスがなく、母親が送り迎えをしなければならぬからだ。

一方息子は、母親のふしだらな理由で大好きな幼稚園を休むはめになり、かなりご機嫌斜めだ。

げんに、私が寝ているベッドの横に、先ほどからぶくれつつらで立ち尽くしている。

「ごめんね・・・幼稚園お休みにしちゃって」

耐えきれず、私も何度もこう謝罪の言葉を述べたのだが

「

息子は一言も口をきいてくれない。

こうなったら仕方ない。

この小さなご機嫌斜めくんを一瞬で満面の笑みが可愛い天使に変える魔法の言葉がある。

「あつ、そつだ。今日の夕ご飯はグラタンにしようかなあ・・・」

「・・・え」

ついに彼の重たい口が開かれた

「あれ？ゆう君グラタン嫌いだったっけ？じゃあしょうがないなあ
。他のものにしよう」

「あつ、いやだ・・・ぐらたんが・・・いい」

「じゃあ、そのふくれたほつぺた。元に戻してくれる？」

「うん！」

ようやく風船の如く膨らんでいた息子の頬がしぼんでいった

さて、息子の機嫌がなおったいま、彼に頼み事をしなければなら
ない。

実は今、非常に頭痛が激しいのだ。

もう「頭がガンガンする」の一言ではすまされないような痛さだ。
ぐわんぐわんする。

元々頭痛もちということもあってか、かなり激しくなっている。ちなみに、夫もかなりの頭痛持ちで、医者からは私より、より強めの頭痛薬をもらっている。

そんなわけで、息子に頭痛薬とお水をとってきてほしいのだ。

「ねえ、ゆう君。お願いがあるんだけど」

「ん？なあに？」

すっかり天使に戻った息子は、にこにこしながら聞いてくる。

「あのね、ママ。いまとても頭が痛い。だから・・・」

「あつ。うん。わかった！」

と、二つ返事で息子はばたばたと部屋を飛び出した。

さすが私の息子、といったところか。

「あたまがいたい」の一言でどうやら頼み事がわかったらしい。

私は息子に感嘆しながら、ため息をひとつはき、目を閉じた。

ばたばたという足音がこちらへ向かってきた。

どうやらもう頭痛薬を見つけてきたらしい。

心配がベッドの横にきた。

「ありがとう」と私はいい、目を開けた。

そのとき息子は、にこにこしながら、私の頭に金槌を振り下ろそうとしていた。

「いやああっ！……！」

一瞬で息子の意図を呼んだ私は、息子から金槌をひったくった。
「っ！？」

息子も心底驚いているようだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……何するの!？」

私は金槌を床に放り投げ、息を荒げながら息子をしかった。
すると息子は涙目でこういった

「だって……ママ、いつてたじゃん……」あたまがいたい」っ
て言ったら、とんかちをふりおろせて……」

息子は今にも泣きそうだった。

私は深いため息をつき、息子を抱きしめながら耳元で囁いた

「いい？それは、ぱぱが言ったときすることなの。ママにはしちや
だめなのよ？」

「どうして？」

「ぱぱは、私より頭の痛さが酷いからよ？だから、ぱぱが『あたま
いたい』って言ったときは、そのとんかちを頭に振り下ろすのよ？
もちろん、前からはだめよ？後ろからじゃないと効果が無いの」

「とんかちをふりおろしたら、ぱぱの、あたまいたいのなおるの？」

「ええ、もちろんよ。だからよろしくね、ゆう君」

私はそこまで言い終えると、息子を離し、頭を撫でてやった。

さあ、悠ゆうもつすぐ夫が帰ってくる。

慎重にやるのよ……？

ナツカゼ（後書き）

息子に夫を殺させようとする、ちよっとダークなおかあさん。

黒い羽と白い女

それはそれは、美しかった

彼女の黒い羽は自由自在に空中を舞っている

・・・一方の彼女は地上に降り立ち、優雅に庭で紅茶を楽しんでいる。

彼女の羽は、己の出番をいまかいまかと待ち続ける

それでも彼女は、微動だにせず紅茶をすすった。

すると、彼女がこちらに気づき、話しかけてきた

「なあ。うちにはな、黒い翼があんねん」

ええ、知っていますよ。

ちゃんと、見えていますよ？

貴方の、美しい羽は

「でもなあ、うちにはそれが見えへんの」

「きつと、黒い羽をつけたうちは、めっちゃかっこいいんやろなあ
」。なんてね」

宝の持ち腐れだ

貴方は、あんなに美しい羽を空へ放りっぱなしにしている。

そして、それを貴方自身が気づいていないなんて。

気づいてください。

貴方には、美しい羽があるんです。

それはそれは美しい、貴方に似合う美しい羽が。

黒い羽と白い女（後書き）

羽⇨相手にしか見えない鏡的な

女性のモデル？それはもちろん某作詞家さん（ry

美しい人

白い鍵盤、時に交じる黒いハーモニー。そしてそれを奏でる白い指
今日新しく入ってきたこのピアノは、調子も良好、とてもすてきで、
繊細な旋律を奏でてくれている。

そしてそれを奏でてくれている白い指の持ち主は、私の教え子。
たしか名前は柚子ちゃんと言ったかしら。

このピアノ教室を開いてかれこれ15年になるけど、こんな天才的
な子を見たことない。

私が教室を始めてすぐは『天才ピアニスト・坂城 風梨、謎の引退。
余生はピアノの先生か』等とうたわれ、いろいろ話題になったもの
だが

今ではもう、すっかり私の功績など世間から忘れ去られ、ここに来
て初めて私のコトを知る人もくるようになった。

だけど、この娘は違った。

6歳という若さで、両親を亡くし、親戚をたらい回しにされて、去
年ようやくある一家に落ち着いた。

そしてその一家は代々ピアノのコンクールに数多く出ている一家だ
からか、柚子ちゃんをこの教室に通わせた。

そして柚子ちゃんは、レッスン開始当日、その親戚から私の昔のことを聞かされるまえにこう言った。

「あっ！かざりさんですよー！」

驚いた。まさかこんな小さい子が私のことを知っているなんて。

なぜ私のことを知っているか聞くと、彼女は（“ゆず”にちなんで）おいしそうな笑顔を浮かべ

「だって、私おかあさんに毎日かざりさんのピアノを聞かされてたんですよっ」

それだけで私の名前、ましてや顔を覚えてくれてるなんて、よっぽど何回も聞いてくれていたのだろう。

嬉しかった。ずっと無くしていた忘れ物を彼女が届けてくれたみたい。

私の教えあつてか（？）、柚子ちゃんはめきめきと上達し、二年も経つとピアノのコンクールを総なめするほどの実力となった。

昨日のコンクールでも優勝し、私の『大会16連勝』を上回る「17連勝」を迎えた。

そして今日、柚子ちゃんにはその新しいピアノで、次のコンクールの課題曲を弾いている最中だ。

「お疲れ様、柚子ちゃん。お茶いれて休憩しましょうか」
ある程度その課題曲が様になってきたころ、私は柚子ちゃんに話しかけた。

「ええ、お願いします。私、鳳梨先生のお紅茶が大好きなんです」
誰が入れても同じであるうティーバッグのアールグレイを、彼女はいつも喜んでくれる。

おしとやかで、可憐で、繊細な少女だ。

いや、女性と言うべきか、彼女も今年で17だ。

お茶を入れ終えたあと、私は再度彼女に声をかけた

「私、ピアノの手入れがあるから、柚子ちゃん休憩してていいわよ」
すると彼女は一瞬怪訝そうな顔を見せて

「ええ！私、先生とお茶したかったのに」

と、頬を膨らませるのだ。

なんとも愛くるしい顔だ。

「終わったらすぐ行くから、早く行かないと、紅茶冷めちゃうでし

よ？」

「は〜い」

気の抜けた返事をし、柚子ちゃんはピアノルームから出て行った。

ピアノの調律は、毎日午後3時きっかりに行っている。

前は業者に頼んでいたのだが、膨大な費用がかかるので、自分で調律の技を身につけることにした。

多すぎではないか、と思う人もいるだろうが。

私は、生徒のために、柚子ちゃんのために、完璧なピアノと完璧な

先生を差し出さなければならぬ。
完璧な先生はここに居る。
ならば、ピアノも完璧にしなければならぬ。

さつそくドの音を弾いてみる。

さすが新品といったところか、美しい音色だ。

しかし、どこか違う。さつき彼女が弾いていた音色と。

おかしいなと思い、今度はレを出してみる、やはり違う。

ミも出すが、やはり柚子ちゃんが出していた音と変わっている。

とうとう私は、一曲弾くことにした。

曲は、彼女が先ほどまで弾いていた課題曲。

ピアノ椅子にきちんと腰掛ける。

いままでずっと人に教えるため、椅子の横で立っているだけだったので、久しぶりの感触だ。

さつそく、序盤の音を奏でてみる。

美しい……嗚呼！なんて美しい音色・旋律・そしてそれを弾く人間！

そうだ、彼女にはいつも『何か足りない』と思っていたが、それは“美”だ。

私みたいな美しさを彼女は兼ね備えてないのだ。

たしかに顔はかわいいが、それだけじゃ私には適わない、ああそうに決まっている。

序盤を弾き終え、中盤にさしかかる。

序盤の美しい音色とは違い、すこしテンポアップしてくる。

そつだ！彼女が私より上？そんなはずはない。

彼女は私より美しくないからだ。

ならば何故？何故彼女は私より上回る記録を達成した？！

私の・・・私の自己ベストを難なく越えたあの女は一体なんなのだ？！

まさか、私の知らないところで・・・裏で手をまわしているのだろうか。

いや、そうに違いない。でなければあんな奴が私に勝てるはずがない。

なるべく・・・なるべく自分より上手くならないように、教えてきたはずなのに・・・！

何故・・・なぜ世間は私よりあの女を選ぶ！？ああ、忌々しい！！！！

あの女にもつと下手糞に教えてあげりゃよかった。

あいつに・・・ピアノなど教えなければよかった！！

もう、これ以上あいつより下に居るのは御免だ。

ならば・・・永遠に弾けなくなってしまう方がいいのだ・・・！！！！！！

「先生？」

気がつくと、柚子ちゃんは後ろに立っていた。

課題曲も、終盤を終え、最後のドの音だけとなる。

私は、ドの音を力強く弾くと、椅子から立ち上がり彼女に向き直った。

「もう、いつまでも来ないと思ってたら、一曲弾かれていたんですね、教えてくれればいいのに」

「あはは、ごめんなさいね柚子ちゃん。じゃあ、私もお茶頂こうかな」

「あつ、私が淹れますよ！」

「いいのよ。私が“入れる”。柚子ちゃんもおかわり欲しいでしょ？」

私は柚子ちゃんの行為を断り、すすんで申し出た。

「そうですね、じゃあお願いします」

彼女はかわいらしい顔で会釈すると、部屋を小走りで行った。

私は、ピアノの蓋を閉め、楽譜を上にした。

なぜか、右手に小さな小瓶を握っていた。中には液体が入っている。なんだろう？これは。

そうか、きつとピアノがもっと上手くなる薬だ。

それならば、彼女に飲ませてあげる他はない。

私は、小瓶を胸ポケットの放ると、部屋の外にでて、ドアを閉めた。

後ろから、ピアノの冷たい視線を感じた。

美しい人（後書き）

好きな“ピアノ”と“紅茶”を入れてつくったものです。

“青は藍より出でて藍より青し”……………
では、自らの身を削り作り上げた“青”に負けた“藍”は、一体ど
んな気持ちになるんでしょうね……………？的な話でした、では。

会話

あ

ん？

ねえ。

なあに？

どうして？

どうしたの？

わからないんだ

それがよのなかよ

それでもわからない

じゃああきらめなさい

あきらめるなんていやだ

じゃあねむることにすれば

わからぬままねるなんていや

そんなこといわれてもしらない

だってあなただっけになるよね

じゃあきくけどなにがわからないの

ずっとおもってたことなんだけど

わたしにきいていいしつもん？

たぶんこたえられるとおもっ

じゃあいつてみてもいいよ

ちいさいころからずっと

おもってたことなんだ

そらはなぜあおい？

そんなの知らない

知らないじゃん

知らないもん

じゃあいい

なにがよ

ねるよ

ん そ
う

会話（後書き）

・・・わけわかんない。笑

桜吹雪

ある春の夜。桜を見に行くために、病院の近くにある公園に車椅子を押しながら向かった。

車椅子に座ってる少女は、私の親友・舞佳^{まいか}。

元々この子が「桜が見たい」と言ったので連れて行っただ。

来る途中、彼女は何回も咳をしていて苦しそうだった。

彼女は、大病を患っていた。

もしかしたら、もう永くはないのかもしれない。

あくまで私の予想だが。

だが、それくらいの苦しさを私は彼女から感じた。

「うわあ、きれい・・・」

すっかりと細くなってしまった腕を懸命に彼女は伸ばしていた。

桜の花びらを取ろうとしていたのだろうか

なんともかわいらしいしぐさだった。

「夜桜って、風流よねえ」

私は溜息をつきながら、彼女に話しかけた。

「ほんとぉ・・・死ぬ前にこんな素敵な景色が見られてよかった・・・」

「・・・え？」

彼女の言葉に思わず大きな声が出てしまった

「・・・もう1週間ももたないんだって、わたし」

残念ながら、私の予想は当たっていたようだ。しかももっと最悪。

「・・・うそでしょ」

それしか・・・ことばが出なかった。

「うそだったら・・・いいんだけど・・・ね」

とたんに、彼女は伸ばしていた手を自分の目にやった。

舞佳は泣いていた

「ずっと……ずっとお……中1から病気になって……学校いけなくなつて……」

「うん……うん」

私は泣きそうになるのを堪えながら、必死に舞佳の言葉に耳を傾けた。

「中学はあ……結局ぜんいけなくて……つでも校長せんせえとかつがあ……うっ……わたしをお……高校に入学させてくれ……てっ……」

もう、私は涙をおさえきれなかった。

それどころか彼女以上にぼろぼろ涙をこぼしてしまった。

一番つらいのは舞佳のはずなのに。

「でもお……結局治らなくてえ……まる1年いけなくて……もう2年生になつちやつて……もう死んじゃうなんて……いやあ」

舞佳も、声を出してぼろぼろ泣いていた。

「私だつて……嫌だよ……舞佳とさよならなんて……したくないっ！！」

「うんっ……でもね、わたし嬉しかったんだ」

「なにが・・・？」

「・・・結衣^{ゆい}がね・・・いつもわたしのお見舞^{みまひ}いに来てくれたこと
「えっ・・・」

「小学校で知り合って・・・中学も違うのに・・・いままで・・・
今もわたしに会いに来てくれる」
目をぐしゃぐしゃとかいて、彼女は必死に笑顔をつくった

「当たり前でしょ？親友だもん」
だから私も、がんばって笑顔をみせた

「“親友”・・・うん」
なぜか。舞佳は寂しそうな顔をした。

「 最期に・・・
・・・よかった」

「え？なんて言ったの？」
中盤が聞き取れなくて、私はもう一度聞き返した。

そうすると、舞佳はさっきの笑顔とは違う、満面の笑みを浮かべて

繰り返した

「・・・最期に、わたしの片思いの人と素敵に景色が見られてよかったっ！」

・・・もしかして、それって私のこと？

「えっ?!・・・私は・・・」

「ふふっ、いいの。聞かなかったことにして。さあ、帰りましょう。消灯時間に抜け出したらまた看護師さんに怒られるっ」

そして・・・ちょうど1週間後・・・

公園の桜がすべて散った頃・・・

“私の”初恋は終わった。

桜吹雪（後書き）

なんかよくわからないけど、とりあえず両思いでした、ちゃんちゃ
ん。

棺のなかで

葬式には、たくさんの方が来てくれた。

僕のお友達も、おとうさんやおかあさんのお友達も。

でも一番多かったのはお兄ちゃんのお友達だった。

お兄ちゃんのお友達はね、とても多かった。

お兄ちゃんはみんなの人気者だった。

涙を流している女の人もいたんだ。

お兄ちゃんが死んだのは、4日前のこと。
交通事故。車に轢かれて死んだ。

17歳・・・まだ若いのにと、おかあさんのお友達が呟いてた

その車に乗っていた人を、僕は覚えている。

・・・そこに僕もいたから。

その日は、お母さんがお友達と遊びにいくとかで、家には学校が休みだったお兄ちゃんしかいなかった。

でね、僕の学校はその日避難訓練で、保護者が迎えに行かなきゃいけないかったんだ。

お兄ちゃんは「仕方ないな」なんて言いながら、迎えに来てくれた。

事故が起きたのはその帰り道だった。

あと数メートルで家についたのに、家の手前で、お兄ちゃんは轢かれてしまった。

いろんなところから血が出ていて恐かったけど、必死になってお兄ちゃんを揺らして、名前を呼んだ。

だけどね、それは動こうとしなかった。

車に乗ってる人は、車からおりて、自分が轢いた人が死んでるのを確かめると、すぐに車に飛び乗り、手前の家の近くにあるガレージに車をとめた。

あ、わかった？

うん、轢いたの。僕のおかあさん。

ガレージに車を止めると、すぐに家の中に入っちゃった。
僕がいるのなんて知らずに。

それからすぐ、家から出てきて、お兄ちゃんを見て驚いた顔をして

「慎治！慎治！！どうしたの？大丈夫！？」

なんて言うの。殺したのは自分なのに

それから僕がいるのに気づくと、鬼のような形相で

「ねえ、慎也！何があったの？慎治、車に轢かれたの？」

って聞くの。

まるで、さっきお兄ちゃんを轢いた女と、ここに居る女が別人み
たいに。

だから、僕は言ってあげたの。

「お兄ちゃんを轢いたの、おかあさんでしょう?」

その結果がこれだよ。僕も殺されちゃった。

それなのにおかあさんは僕らの棺の前で平気で涙を流して泣いている。

この事実を知ってる人は、もうこの世・・・というかあつちの世界にはいないんだ。

ねえ、僕ね。お兄ちゃんと約束したんだ。

大きくなったら、おかあさんを呪い殺そうって!

う
ぶ
ぶ。

棺のなかで（後書き）

もし、亡くなって1週間。人の心がこの世に彷徨ってたら。って話。

「大きくなったら」なんて言ってるけど。あと3日で消えちゃうんです。

つかまえて

あっ・・・

ねえ、見てみて。風船が飛んでいく

誰が飛ばしたんだろう？

あれ？あの風船何色だっけ・・・だんだん見えなくなってきたよ

うわ～このまま宇宙まで飛んでいくのかな？

ってか、風船って宇宙に行ったらどうなるの？破裂するかな。

でも、やっぱり宇宙に行く前にしぼんじゃうんだよね、かわいそ～。

ってかさ～、風船ってちびっ子達のがれだよな。

あたしも昔もらってたもん。ほら、ケーキ屋とかで配ってるやつ

「お嬢ちゃん、何色がいい？」って大人びた女の人に言われるのも嬉しくて。

それで、決まってあたしは「ピンクっ！」って言うの。

女の子って、幼稚園生の頃は決まってピンクが好きでしょ？

でね、そのケーキ屋のお姉さんは、毎日風船もらいにくるあたしの顔覚えてて

あたしが色をいわなくてもピンクの風船くれるの。

しかも、自分が持つてる風船の束からじゃなくて、ちょっと離れたところに置いてある風船を。

たぶん、あたしのためにとっておいてくれたんだよね。

「この人すげーかっけー！」って、子供ながらに思っちゃったな。

だからね、そのころからもうずっと「将来の夢はケーキ屋さん」だったの。

すごいでしょ？幼稚園生の頃から思ってた夢を叶えたんだよ、あたし。

そう、今度はあたしが風船を配るばん。

むりやり『開店セール』って口実で風船を発注したんだ。

赤・青・緑・黄色・紫・・・いろいろ用意したけど。

やっぱり一番多く発注したのは、ピンク。

あたしの大好きな、ピンク。

・・・ねえ、聞いてる？

・・・・・・ああ、ごめんなさい。

貴方、さっき飛んでいってしまったわね。

そんな貴方に、ピンク色の黙禱^{ふうせん}を。

つかまえて（後書き）

ふーせんってえ、ガスでういてるんだぞお。
みんな、しってたかなあ？

手紙

鷺下 鏡子様

拝啓 緑のまぶしい季節となりました。いかがお過ごしですか。

なんて、堅苦しい挨拶はこれくらいにしておきますね。

鏡子ちゃん、お元気ですか？

置戸 響子です。

覚えてる？釘原高等学校3年D組の佐々木 響子っていえばわかるかな？

高校生の頃は、お互い名前の読みが一緒だったから苗字からとって「さつき」「さぎうち」とよびあっていたね。あの頃が懐かしいわ。

突然のお手紙を大変申し訳なく思っています。

実はあなたにどうしても伝えなくちゃいけないことがあって。

なんせ家の住所しか知らないからメールも送れないし・・・というわけでお手紙という形でお伝えさせていただきます。

3年A組に、田中^{たなか} 亥澄^{いずみ}って人がいたの覚えてる？

あの人だね、先日亡くなったの。

新聞やニュースを見ればわかるんだけど、どうやら殺人事件らしくて。

私ね、実はその人とは大学時代からの親友だったからすごくショックで・・・

（鏡子ちゃんは大学から離れちゃったから知らないと思うんだけど・・・）

犯人がとっても許せないの。わかるでしょう？

それでね、過去のメールに何か手がかりがないか必死に探したの。

そしたらね。その人3ヶ月前にこんなことを言っていたの

『響子ちゃんと名前が同じ読みの人知ってるよ。殺したいほどムカツクやつだけど（笑）』

決してね、鏡子ちゃんを疑ってるわけじゃないの。

ただ、その後のメールで『響子ちゃんも知ってる人だよ』って言われて

でね、私卒業アルバムを引っ張り出して「きょうこ」って人を探してみたの。

そしたら、鏡子ちゃんにたどりついて・・・

何度も言うけど、決して疑ってる訳じゃないんです。

ただ、確認がしたかっただけなんです。

鏡子ちゃんは・・・事件には関わってないよね？

お返事お待ちしております。

敬具

置戸 響子ちゃんへ

いきなりの手紙でびっくりしちゃったわ!!

さっきー結婚したんだ!!おめでとー

結婚式に呼んでくれればよかったのにー (<|>)

まあ、釘高卒業してからずっと連絡とってるから仕方ないか (;
)

でもあたしも結婚したんだよ!だからもう驚下じゃないのよ (笑)

もうお互い「さっきー」と「さぎうち」じゃないんだよね、なんだ
か悲しい (泣)

で、本題に戻るけど

田中くんのご事はよく知らないの、ごめんなさい。

A組の教室なんて行ったことなかったし、男子とはあんまり話さないタイプだったしね。

でも、死んじゃったのはとても残念です。おくやみもしあげます
m (| |) m

大人になった「さつき」に逢いたいな、今度ランチしましょ

鷺下 鏡子・・・改め

田中 鏡子より

手紙（後書き）

よくよく見れば誰が犯人かわかります。笑

ゲーム

定期を、改札機にかざす。

簡易な扉は開き、私達のみちをあけてくれる。

最近の電車は便利になったものだ、と感心。

最寄り駅の西口を出ると、そこはスーツを着た男女が行き交う街。

携帯をいじりながら道を歩き、車に轢かれそうになる男性。

誰かが自動販売機に落とした小銭を、一生懸命拾おうとする老人。
母親を見失い、必死にぬくもりを探し続けている子供。

誰もがそれぞれ“こころ”がある、自分の“人生”を持っている。
もちろん、私はそのいのちに干渉するつもりはない。

街をすこし歩くと、だんだん高層ビルはなくなっていく、住宅街になっ
ていく。

もう夜遅いので、外に出歩いているのは、私くらいだ。
その住宅街をさらに行き、突き当たりを右に曲がると、急な坂が見
える。

その上には原っぱしかなく、普段は子供が遊び目的でしか近づかな
い。

そんな原っぱに向かうべく、私は坂を上る。

コツコツと、ヒールがコンクリートの道を叩きつける。
ただ、道路は変わらずその道を示す。
それが、自分の唯一の定めだからだ。

坂を登り切ると、雑草だけが生えた野原につく。
急斜面をある程度上ったので、ビル街や住宅街よりは少し高い。

だから、そのあたりを一面に広げることができる。

ただ、大きいだけのビルはその明かりを失い
住宅街の家々はすでに眠りにについている。

もう、だれも私の存在などに気づかない。

私は雑草だらけの地に寝転がる。

草が首をちくちくと、攻撃してくる。

ただその代わりに、背に柔らかい感触を与えてくれる。
私はこの柔らかさが好きだった。

いっそ、死んでしまおうか。と、ふいに思いつく。

誰も居ない、誰も来ない、誰も知らないこの場所で。
一人寂しく、雑草に埋もれて。

私はさきほど、ある罪を犯した。

決して法にかかることはないが、母親として残虐な行為をした。

そんな私が、のうのうとこの草地に身を預けていて良いのか、と。

私には“こころ”があるのだろうか？

あるのならば、何故子を棄てるという暴挙にでたのか。

わからない。自分でもわからない。

ただ、わかっているのは、あの子が私の温もりを探し今も彷徨っているということだ。

あの子には“こころ”があるはずなのに。

私はあの子の“こころ”を摘み取った。汚濁なるこの手で。

あの子が一人で自宅に帰れたら、あの子の勝ち。

帰れずに、一人寂しく私を求めていたら、私の勝ち。

そう、これはゲーム。

決して、愉快ではないゲーム。

嗚呼、お月様。

貴方はどちらに軍配を上げるのでしょうか？

ゲーム(後書き)

月「しらねーよ」)

重ね技

「大丈夫、貴方に幸運はかならず訪れますわ。」

・・・大抵の客にこの台詞を吐けば、相手は喜んで大金を渡してくれる。

占い師とは、なんて楽な職業なのだろう。

A市のはずれにこの占い館を建てたのは3年ほど前だった。

別に、理由などなかった。

ただ、他人の不幸話を聞いて「かわいそうに」と同情の言葉をかけ心の中でほくそ笑みたかったのだ。

A市は狭い土地のわりに人口が多く、そこに占い館を建てると「あそこの占い師は当たると評判」と、根も葉もない噂がすぐに出てきてくれる。

おかげでいまでは、館の隣に一軒家を建てられるほど裕福になれた。さつき来た客は「同棲していた彼氏に浮気され、自分の通帳など金目になるものを全て盗まれ逃げられた」と泣きながら語ってくれた。

私は何度も慰めのことをかけ、先ほどいった“幸運は訪れる発言”を行うと、みるみる彼女の表情があかるくなり

「ありがとうございます、先生に救われました」と、ここにこしながら50万円置いてくれる。

「青い花瓶を買ってそこに赤いチューリップを植えると幸運が訪れる」くらいなら、私がとづくに実践している。

もらったばかりの50万円を指でいじっていると、また客が来た。

背が高く、スタイルも良く、黒髪が似合う美人・・・女性だった。どこかで見たことあるような気もしたが・・・忘れた。

「ようこそ、占い館『ヨード・ラーホ』へ。・・・あら、何かお悩みな顔ね」

私はいつも客に言っている台詞をそっくりそのままその女性に言った。

「だいたい、A市の（またはここにくる）女性は『ヨード・ラーホ』を逆さまに読むと「ホラだよ」になることに気づいていないのだろうか？」

「ええ・・・実は、ある詐欺に騙されましてね」

眉間に皺をよせ、悲しそうな顔を作った彼女は神妙な面持ちでそう語った。

「そう・・・じゃあこの私に話してみなさい。ゆっくりと、最初から最後まで」

「はい・・・私、以前ある市で占い師をしていたんです。といって、本当に占いが出来るというわけではなく、いつも『貴方は救われます』と言ってるだけの占い師だったんです。ようはペテン師です。そんなペテン師でも信じる人はやっぱり信じて、ある程度のお金は貯まるようになりました。このお金で占いをしている場所の近くに家でも建てようかと想ってた矢先、私は顔を変えられました。意味わかりますよね？深夜の路上で襲われて気がついたら知らない家において、鏡を覗くと自分じゃない私がうつってるんです。整形されてしまったのです。寝ている間に整形なんて無理 と思われるかもしれませんが、目の角度や頬肉を削るだけで人というのは大幅に変わってしまうものですね。きっと私の財産を狙っての犯行なのでしょう。きっと私を整形した犯人は“占い師の顔”に自分を整形させたはずです。本当に怖いですが、なんて恐ろしいのでしょうか。あら、貴方。どこかでお会いしませんでした？何処かで見えたことある顔なんです・・・」

どうやら「幸福になれます」だけでは帰ってくれそうにない客だ。

私は後ろにある棚の奥から毒薬をとりだしお茶にいれ、その女性に差し出した。

さて、どこに埋めようか・・・

今日の山羊座のラッキースポットはなんだったかしら・・・

重ね技（後書き）

嘘に嘘を重ねてみたよ。

ホットライン

『いまから自殺します。』

勉強中に鳴り響いた携帯から飛び出した文字は、とても奇妙で不快なものだった。

アドレスを見ると、アドレス帳に登録されていないようで、ただアルファベットの列が並んでいるだけだった。

くだらない。

どうせただのいたずらだ。

そう思いながらもアドレスの末を見ると有名携帯会社の名前がある。数学の胸糞悪くなる難しい問題に退屈していた俺はその“いたずら”に乗ってみることにした。

『ちよつとまで。どうした？なにがあった。』

急いで簡易な文章を送るとすぐに返事は返ってきた。

『あなたのお名前は？学生ですか？』

自分から不可解なメールを送りつけておいて個人情報聞き出すなんていかにも怪しかったが
どうせそこまで珍しい名前でもなかったので、正確に携帯のボタンを打った。

『内藤 みらい 高3』

『みらい君？みらいさん？』

『君。おまえは？』

『たかなし高梨 みらい・さん。あたしも高3』

『ってか自殺って何？送り間違い？』

『……いろいろ悩んで。誰でもよかったからメールしたの。適当にアドレス打ち込んで。五回目でみらい君に送れた。迷惑だったよね？ごめん……』

本当はもうメールを送る義務なんてないのだが

同じ名前・同じ歳の女子高生に少なからず興味が湧いて、俺はいつの間に関彼女とメールを続けていた。

『別にいいよ。なんか嫌なこととかあったんなら相談のるけど』

少し時間が経ってから、メールは届いた。

『……今日の前で、親が死んでるの』

暇つぶし程度で返信したメールからは、驚愕の“おかえし”が待っていた。

『え？どつどつ』

そう返すと、「みらいさん」から10桁の数字が送られてきた。

どうやら、ここに電話しろ。というこらしい

両親が寝ていることを確認した後、携帯にその数字を打ち込んだ。

「……もしもし」

「……もしもし？」

返ってきた声は、とても澄んだ声だった。ただ、その声からは動揺や哀傷が伺える。

「えっと……みらいさん？」

「うん……みらいくん？」

「ああ……」

「ごめんね……急にメール送ったりして……自分と同じ名前の“mirai”ってアドレスにうって……もう誰でもいいから聞いて欲しくて……」

これほどまでに自分のアドレスが簡潔だったことを喜んだことはない。

「いや、別にいいんだけど……それより親が死んでるって」

「家に帰ったら・・・パパも。ママも。未喜^{みき}・・・妹も・・・殺されて・・・もうどうしたらいいかわからなくて・・・」

これからさき、この悲劇の少女に降りかかってくる悲しみ・負担は計り知れないことだろう。ただ、これだけは言える。

自分をなくしてしまっても、何も解決しない。できっこない。悲しみの後に来るかもしれない喜びを、待ち受けることができない。彼女は、死んではいけない・・・

「・・・死んだらダメだ」

頭の中が混乱していても、どうしてもこれだけは言っておきたかった

「・・・でも、もう生きてる意味がわからないよ・・・」

「・・・俺の為に生きて」

恥ずかしげもなくそんなことが言えたのは、どうしても“みらいさん”を生かしておきたかったからだろう。

「えっ？」

「こうして出逢えた友達じゃん。俺さ、女子とこんなに話すなんて初めてでさ……」

わざと明るく振る舞ったのは、彼女にも明るくいて欲しかったからだ

「……私も初めてだよ？男子と電話するの」

「そうなの？でもみらいさんってモテそうじゃん」

「……モテないよ」

それから、“みらいさん”の家に警察が到着するまでの数十分間

当たり障りのない話をしてその“場”をしのいだ。

……彼女の生命線ホットラインを繋ぐため……

ホットライン（後書き）

最後なんかぐだぐだになってしまいすみません・・・

え？最初から最後までぐだぐだだった？それはそれは・・・）

『死刑宣告』以来のわけのわからないものができあがってしまいました（・・・）

私は一般人。

最近、母が人気アイドルグループにはまりだした。

別に私はそのことに関して、応援も干渉もしない。

ただ、夕方。夕飯の準備も忘れて先日発売されたDVDを見ながら歌って踊るのはやめてほしい。

「ねえ、ごはんは？」

少しずつ老いてゆく母の唯一の楽しみを邪魔するのには少し後ろ髪が引かれたが、私のおなかには限界を達していた。

母は、リモコンの一時停止ボタンを押し、私をまじまじと見つめると「ああ」と何かを思い出したかのように笑い今度は電源ボタンを押しした。

127

「ごめんなさい。おかあさんすっかり忘れちゃってた。今、何時？」
「もうすぐ七時よお。」

趣味を中断させた罪悪感もあってか、私はすこし甘めの声をだした。

「あらあら、ご飯はもう炊けてるのよ。でもつい『Wing』のDVD見なくなっちゃうのよお。」

母は私が本気で怒ってると思うてるのか、語尾の口調は少し甘かった。

こつこつとこころは血筋が出る。

『Wing』とは、先ほどまで母が見ていたテレビ画面に映ってい

る四人組のアイドルグループの名前だ。

CDを出せば必ず1位をたたき出し、(たとえ全員がそろってなかったとしても)TV番組に出れば視聴率はうなぎ登り。

まさに今をときめく“アイドル”たちだった。

しかも四人とも全員イケメンとくる。

母がはまったきっかけは、彼女がいつも見ているニュース番組に、『Wing』の中でも一番人気である香月くんがゲスト出演したことだった。

最初は「あら、この子かわいい顔してるのね。」程度だったのが、今では「一人で行くのは恥ずかしいから、一緒に『Wing』のコンサート行きましようよ。」と“一生のお願い”までしてくる。こういうときは必ず「麻ちゃんの宿題はお兄ちゃんにやらせておくから」と首を傾げてほほえまれるので、私もまんざらでもない様子で『Wing』のファンになりきる。その度に兄の浩一からは「俺も麻実みたいに女だったら宿題やらすにすんだのに」と文句を言われる。

夕食の準備が整い、一家全員が席に座る場所でも母は私の方に顔を向け『Wing』の話をし続ける。

「最近の俳優にはね、香月くんみたいな清楚な子がいないのよ。なんか、外見だけって感じ。それにくらべて香月くんといったらもう！顔もいいし中身はしっかりしてるし、さっきのDVDでも見たけど、ファンの前で笑顔も忘れないし。ああ、なんで麻ちゃんは『Wing』のファンにならないのよ。」

いつもは周囲に清楚におとなしく笑顔を振りまくような母が、こんなに饒舌になるのはこの夕食時くらいだ。

「私は、そんな風にきゃあきゃあ言うタイプじゃないの。おかしいよね、お母さんの子供なのに」

『あなたの子供なのに』。そう言うと必ず母は「もう、この子つたら。」と、少し頬を紅潮させながら引き下がってくれる。

元々、私が『Wing』のファンにならないのは彼氏に『Wing』のファンになることを禁止されているからだ。

「麻実は、『ファンの中の一人』じゃなくて俺だけのものになってほしい。」という、少し照れくさい理由で。

私の彼氏は、今母が平然とした顔で話題に出している香月くんなのだ。

きっかけは、私が好きなアーティストのライブに行った時だ（もちろん、そこに母は同行していない）。開始前、ふと隣の席を見ると、あの母のお気に入り香月くんが座っているのだ。

しかもサングラスやマスクなどの“変装”もせず。

なので私は、嫌味というよりは忠告の意味を含め、前を向いたままの状態で

「人気アイドルが変装もせずこんなところにいるの？」と囁いた。

香月くんは驚いた顔で私を一瞥し、すこし微笑みながら「握手とかサインとか求めないんだ」と言った。

「私、あなたのファンじゃないから」

ここまできっぱり物事を言うのはめずらしいな、と自分で思う。

そっか。と彼は苦笑すると「でも、このアーティストはファンなんですよ。どんな曲が好きなの？」と今度こそ私の方に向き直って聞いてきた。

お互い、好きなアーティストが同じということもあり、付き合い始めるのに時間はかからなかった。

彼から禁止されていることはもう一つある。

それは『付き合っていることを家族や友人に言わないこと』

その禁止事項は納得でき、私もさらさら言つつもりはないが、もし、と心の中の好奇心が囁く。

もし、母にこの事を言ったら、どんな反応をするんだろうか。

あら、あらあら、そうだったの？お母さん全然知らなかったわ。どうしてもっと早くに言ってくれないの。まあ大変。おば

あちゃんに電話しなきゃ。ああ、それからお義母かあさんにも。まあどうしましょ、うちの娘こが香月くんとかだなんて。ねえ、結婚はいつするのかしら。やっぱり高校を卒業してから？いえ、それじゃ早すぎるわね。もうすぐ受験も控えてるんだから。やっぱり大学に入っ飛ばらうの方がいいわよね。ねえ、香月くん、ご挨拶はいつしてくれるのかしら？

降り続く母のマシニングトークを想像すると、笑いは想像を越えて口からあふれ出す。
きっと彼もこういう結果を望まないだろう。

そういうわけで、私は今日も“一般人”のフリをする。

私は一般人。(後書き)

『 。 』(ダッシュ)の使い方を勉強したくて書いたもの
なんですが、思いのほか長くなってしまった。笑

一般人のようで、一般人ではない。そんな高校3年生の女性でした。
ちなみに『Wing』のモチーフはとくにありません。テキストに
つくりました(『テキスト集』だけに?)

平均年齢が19歳くらいの男の子たちだと思っていただければ。

STARRY START

ベランダに出ると、満天の星空。

ああ、私はきつとこの幸福を永遠に望んでいるのだ。

...

高校に入学して、私はすぐに天文部を探し、入部希望を申し込んだ。もともと、この高校に入ったのは天文部の活動が活発に行われていることを知ったからだ。

おばあちゃんは「星子ちゃんしよこの成績ならもつと良い高校にゆけるだろうに」と愚痴をこぼしていたが。

私が星に惹かれたのは、両親の死がきっかけだった。

私が中学に入つてすぐに、“交通事故”というものが二人を知らない世界に連れていった。

せめて、どちらか残して欲しかったのにと何度、神さまを恨んだことか。

母は元ハープ演奏者で、星が大好きで『星座案内人』なるちよつと胡散臭い資格ももっていた。

父は天文学者で、母のハープの演奏に惚れて、猛アタックして結婚にこじつけたそうだ。

二人は、私にどうしても星を好きになつて欲しかったらしく子供の頃はいつも星座に関わるギリシャ神話を、『ももたろう』の代わり

に読み聞かせたり、夏の深夜「ペルセウス座流星群が見られるから」と、寝ぼけた私を引きずって山奥に行った（彼らはそれをあろうことか『キャンプ』と呼んだ）。

子供のころの私は、『束縛』という言葉が最も嫌いで、自由奔放な人間だったので

親が縛り付ける“天体”が、私は嫌いにさえなっていた。

彼らもそれを悟ったのか、私が小学6年生になるとあまり星について語らなくなった。

しかし、小学生生活最後の夏休み。

母はある夜、私になかなか眠れないとベランダに私を連れ出し、輝く星を美しい目で眺めながらこう囁く。

「ねえ、しょうちゃん。見て。星がたくさん見えるでしょう？あの星の一つ一つは生きてるのよ。もちろん、私たち人間みたいに息をしたり歩いたりはしないわ。でもね、星々はお互いに会話ができるの。」

視線を星から私にうつし、ぎゅっと私を抱きしめながら乙女^はは言う。

「見て、あそこに大きな星があるでしょう？あの星と、それからそれのちよつと右下にも大きな星があるわね。それからそれに一直線に左にいくと見える星、この3つの星を繋げるとどうなるかしら？」

母の言われた通り3つの星を目をこらしてみると、ある図形が浮か

び上がる。

「・・・三角形になる」

「そうね。三角形！三角形は人間が作ったっていうのはわかるわよね？」

「・・・うん」

「ね？星もね、お互いに“会話”をして三角形を作れるのよ。星座だってそうよ。あそこに見える蠍座だって、星々が作り上げた“ダイアローグ”なのよ？ふふ、『ダイアローグ』って表現は貴女にはまだ早かったかしらね？」

『星座は星々の会話集』なんて、考えたこともなかったから、そのときの母の言葉は今でも鮮明に覚えている。

その三角形を見ていると、天体を嫌う気持ちなんて、すぐに消えてしまった。

そんな母と、その母を愛した父が、いつぺんになくなってしまった。まるで、今まで私が星を嫌っていたことへの報復かのごとく。

だから『星を愛する』ことは、『両親を愛する』ことなのだ、私は悟った。

残念ながら中学校に天文部はなかったの、私は学校から帰るとすぐに望遠鏡をベランダにセットして、天体観測の準備を始め、毎日のように星を見ていた。

あんまりに星ばかりみて、勉強を怠るので、おばあちゃんに望遠鏡を壊されかけたこともあった。

(実際私は頭はよく、勉強などしなくてもテストで良い点数はとれていた)

そして、天文部が有名な高校に、私は入学した。

明日が、初めての部活になる(最後に天文部に参加したのは部活見学の時だった)。

私は別に、将来ハーブ奏者になろうとか、天文学者になろうとかは思わない。

ただ、両親が愛していたこの星々を、私も愛でたくなっただけだ。

こうして私は、今日もベランダから見える満天の星を見つめる。

私はずっと、この星を見たい。

ああ、私はきつとこの幸福を永遠に望んでいるのだ。

STARRY START (後書き)

星に惹かれた星子さんのお話。

笑 ってか英単語のタイトルってテキスト集では初めてなんですよね。

子羊の火遊び

「お隣、よろしいですか？」

近所のスーパーで買い物を済ませ、1階のサービスカウンター横のベンチに休憩がてら腰掛けてしていると、高校生くらいの顔の整った男の子が私に話しかけてきた。

「え。ええ、どうぞ」

別にわたしは3人はゆくに座れるベンチを占領していたわけではない（むしろ細々と狭く座っていた）のでその少年の問いかけに戸惑いながらも、すこし端に寄るフリをして少年の間に答えた。

「ありがとうございます」

男の子は私にほほえみかけると、ちよこんとベンチの真ん中に座る。少しその彼と密着するかたちになって、ときどきする。

「お子さんはいらっしやるんですか？」

不意に男の子がしゃべったので、一瞬私に向けて話しかけてるのがわからずにいた。

「え？・・・はい。もうすぐ10歳になる男の子。」

ふと、息子があと6、7年するとこんな落ち着いた高校生になるのだろうかと思像したが

その想像は私の頭の中ですぐに打ち消した。

ありえない。あんな奴が。

「かわいいですか？」

優しい微笑みを浮かべたまま男の子が問いかける。

少しの間、その問いに答えられなかった自分がいる。

「・・・・・・・・」

少し黙っていると、男の子は一つ溜息をもらすと、今にも泣き出し
そんな悲しい顔を浮かべて

「知ってます。息子さん・・・と、あなたの旦那さん。あなたに酷
くつらく接している・・・と。」

「っ・・・・・・・・!？」

ぎょっとして、大声を上げだしてしまいそうになった。

それをなんとか抑えながら私はその発言の真意を問うた。

「えっ・・・・・・・・どうして・・・・・・・・あなた・・・私・・・・・・・・えっ?」

だが、どうやら言葉にならなかったようだ。男の子は苦笑している。

結婚してもう12年になるだろうか。

10年前までは、私の夫は本当に親切で落ち着いた、それこそ私の横にいる男の子の様だった。

だが、10年前。つまりは私達に第一子が生まれると、だんだんあの人は変わっていった。

毎晩のように続く夜泣きに、毎日イライラするようになり、日曜でも家にいることが少なくなってしまうた。

また、夜遅くに帰ってきたかと思うと「あいつを俺に近づけさせるな」と吐き捨て、息子を片手でつかみ2階の物置部屋に押し込め、テーブルをドアに押しつけ開かなくさせた。

そんなことをすればもっと騒ぐことを知らずに。

案の定、息子はぎゃあぎゃあ言いながらドアをどんどんどんどんどん叩く。

そしてこれも案の定、それに余計にいらついた夫は、今度は私に“制裁”を加えた。

私が息子を助けるため、バリケードのテーブルをどかそうとしたのも癪に障ったらしい。

度重なる暴力の痕は、今も私の腕や足に残っている。

そして、そんな生活が続いてはや10年。

小学5年生になり、ある程度社会の常識が身についた息子に、夫はこう囁いたそうだ。

「おまえのお母さんは、おまえが赤ちゃんのころおまえを部屋に閉じ込めてさらに、おまえに暴力をふるっていた。おまえの腕の傷はそのとき出来たものだ。」

自分が赤ちゃんのころの記憶なんてあるはずがない。

元々お父さん子だった息子は私の弁明も聞かずその囁きを信じ、私を敬遠している。

キモイ。近寄るな。クソババア。暴力女。パパがかわいそう。一緒に住んでるのかと思うとヘドがでる。俺ホントにおまえの息子？

息子の力一杯の罵声を思い出し、私はつい……男の子の前で号泣していた。

男の子はなにも言わずに私にハンカチを差し出してくれる。あふれ出す涙に余裕がなかった私は男の子からハンカチを受け取って目頭を押さえる。

とても、良い匂いのするハンカチだった。まるで、初恋の匂い。なんて言ったら男の子に失礼だろうか。

ある程度自分の嗚咽が収まると、私は再度その男の子に問いかけた。

「どうしてそのこと……知ってるの？」

すると男の子は、私の頬に左手を添えながら「ずっと、あなたのことを見てきたんです。」と呟いた。

「えっ？」

「・・・5年前まで、こここのスーパーでレジのバイトしていましたよね？そのころからずっと・・・あなたに片想いしていたんです。」

どきどきどきと。

私の胸の鼓動は高鳴った。

この、胸の高鳴りはきつと、嘘じゃない。

ああ、神様。お願いです。

この、哀れな子羊の鼓動を、どうか、お許しください。

子羊の火遊び（後書き）

なんだか『私は一般人。』と同じような展開になったような気がするけどまあ気にしない。

もしかしたら続編書くかもです。

というかさろそろテキスト集の中でも続編を書いてみようかと。

銃撃戦の末に

こういうとき、女は恨めしく、羨ましい。

目の前の女子は、ただでさえ醜い顔をさらに歪ませ、その目から清い水滴からぼろぼろこぼれている。

女子のまわりにはクラスの大半の女子が囲んでいる。

大丈夫、とか、最低だよ、とかいろんな声が聞こえてくる。

それは少なくとも俺を援護するような声ではないことは確かだ。

たった一言。

たった一言、その女につきだしてやったただけなのに。
その刃は鋭くその女に刺さり、魂を持って行ったようだ。

・・・いつも気にくわない、いや、“気にくわない”くらいでは済まないほど苛立たしい女だった。

席が隣ということだけでいちいち気安く話掛けてくる。

宿題は終わったの？あんたっていつものろまだからどーせ終わってないんでしょ。

うはっ！字だけでなく絵も下手なんだっ。うけるんですけど。

いつも俺に向かって発してくるのは言葉でも会話でも独り言でもない。
マシンガンだ。

そのマシンガンをいつも俺は受け止めなければならなかった。
さもなければ醜い女はもう片方に担いでいるバズーカを撃ち込んでくる。

ねえ、聞いてんのかよ。あんたに向かって話掛けてるんだ
けど。耳聞こえねーのかよ。耳鼻科行けよ。

マシンガンをいつも受け取れるわけがなく、1日のうち5、6回は
バズーカを撃ち込まれる。

それでも俺は、自分の手の中にある刃を女に向けることは出来な
かった。

この席になる前のこと。つまり席替えをする前、その女の隣になっ
た(なつてしまった)友人が、マシンガンとバズーカの攻撃に耐え
きれずに

「うぜーんだよブス。いちいち話掛けてくんない」

・・・刃を振りかざしてしまった。

偶然その現場を見ていた俺は突然教室に響き渡った、がたん、と椅子が倒れる音とぎゃあぎゃああと怪獣が吠えているかのような泣き声に鳥肌が立つ。もちろん、悪い意味で。

この女は、アルコールいらずの泣き上戸だった。

どうしたの、と心配するフリをして好奇心丸出しで駆けつける女子達にその女は、最後に爆弾を友人に投げつけた。

「紙村^{かみむら}が、いじめるの」

高校1年にもなってそれはないだろうと思ったが、泣きじゃくったその女の言葉は他の女子を納得させるには十分だった。

紙村 俺の友人の紙村 芳樹^{よし}は、今でもクラスの全女子を敵に回している

紙村くんって、女の子を泣かすの？

なんかね、自分に嫌な事があるとまわりの女子にあたるんだって
とんでもない罵詈雑言を浴びせるんだって

紙村くんは、悪い人なの

そうよ、紙村くんは悪い人なの。いけない人なのよ。

女子の伝言ゲームは本当に恐ろしい。

普段は温厚で優しい紙村は、今ではクラスでヤクザのような存在に
なって避けられている。(もちろん女子だけに)

だから、席替えでこの女の隣になったとき、クラス中の男子から慰
められた

ある程度慰めの言葉をもらった後、最後に紙村にこう言われたのを
今思い出した。

絶対に、ブスノに齒向かうようなことを言つなよ。

そんな忠告をすっかり忘れ、白野うすの茜あかね 通称『ブスノ』は俺
の言葉を受けわんわんと泣いている。

なんて言い返したのかは、もうこの泣き声に埋もれて忘れてしまっ
た。

おそらく紙村と同じようなことを言ったのだと思う。

星河^{ほしかわ}ってさ、めっちゃブサイクだよな。

顔も性格も醜いおまえに言われたくないよ。

さて。

もう言ってしまったものは仕方ない。

次に備えるしかない。

次に来る爆弾。

女子たちの目を一斉に嫌悪を目にするその爆弾を防ぐには。

一体どうしたものだろう。

なあ、紙村。

いっそ俺は、自爆したほうがいいのだろうか

銃撃戦の末に（後書き）

いますよね、そういう女子。

皆さんの周りにはいらっしやいますか？笑

要はもう、触らぬ神に祟りなしなんですよね・・・

白野はきつと、男子と仲良くしたくて、その方法を間違えてるだけなんです。

もし皆さんの周りにいらっしやったら、それを理解してあげてくださいね。

愛された人

ちよつと超えればなんてことない壁に人はよくぶつかる

なんてことない壁に人は慣れながら生きている。

生きるために慣れるのだ。

だが、時々軟弱な人間はその壁を恐れる。

少し足を上げればいいだけなのに、まるで自分には足がないかのよう
うに怯える。

そして最後には、死を選ぼうとする。

そういう奴は大抵こう言う。

私なんて、なくなっちゃえばいいんだ。消えてしまえば
いいんだ。

まるで自分なんて最初から居なかったかのように。

本当に、消えて無くならなければならぬ人は
本当に、本当に、とても、多くの人に愛された人だと思う。

*

*

*

祭壇に立てかけられている遺影には、きらびやかな女性の笑顔が映されている。

場所が違えばつい微笑み返してしまいたくなる写真だ。

しかし、その笑顔を作っている張本人は、祭壇の中央の棺で永遠の眠りにについている。

ここ最近ニュースやワイドショーを騒がせた「B市女子大生連続通り魔殺人事件」

B市に住む女子大生が5人も殺害された、嘔吐が出そうになる嫌な事件。

この棺の中で眠っている女性は、5人目 最後の被害者である倉科くらしな 璃雪りゆきさん。

本当は、殺されるはずの無かった女性だ。

4人目の被害者が出てしまった際、犯人（名前なんて忘れた）は身元が分かってしまう重要な証拠（頭髪だったか、免許所だったか、それも忘れた）を残していた。

警察は、綿密な捜査から、その証拠の男を犯人と確定し、犯人の自宅に逮捕状を所持し乗り込んだ。

しかし、逮捕状を見た犯人は6人もいた刑事・警察官を押し倒し、逃走した。

刑事達は体制を立て直し、すぐに犯人を追う、追う、追う。

6人も居るんだから、捕まえないはずがない。

実際、刑事達はすぐにその犯人に追いついた。

あと少し
先頭の警察官があと少し手を伸ばせば犯人のセーターを捕まえられる距離まで来た。

しかし、犯人はすりと体を翻らせ、曲がり角を曲がった。

その曲がり角に、これから大学に行く予定だった倉科さんがいることを知らずに。

思いつきなのか、とっさの判断なのか、それとも最後の悪あがきだったのか。

倉科さんの姿を目にとめた瞬間、靴下の中に隠してあった果物ナイフで犯人は胸をめがけ彼女を刺した。計算か、運命のいたずらか、偶然か、そのナイフは見事に倉科さんの心臓に突き刺された。

警察官が曲がり角を曲がった時見たのはすでにナイフを抜かれた若い女性の抜け殻と、笑みを浮かべた犯人だった。

気が済んだのか、犯人はそのナイフで自分の心臓も刺し、見事に命を中した。

あと少し、手が届かなかっただけで、警察は2人の人間を殺したのだ。

最後のお別れの時、棺の周りには多くの人が集まった。

両親、兄妹、中高大の友人、近所の人
倉科さんはいろんな人に愛されていた。

昔、まだ俺が葬祭事務員の研修員だったころ、チーフに言われた
「いいか新海^{にいみ}。ぜったい葬式で泣くなよ。葬祭アシスタントが葬式
で泣いたらアシスタント失格だ。葬儀屋が平静を保つてないで誰が
保つんだ。」

俺は、いま、アシスタント失格となった。

倉科さんの両親は遺体に「ありがとう・・・ありがとう」と何度も
何度も繰り返し
大学生の兄と高校生の妹はそれぞれ遺体の手を握ってぼろぼろ涙を
こぼしている

倉科さんの友人はお互いに肩を寄せあつて涙を堪えている
近隣に住んでいて、倉科さんと仲が良かったおばあさんは、棺にお
供え物をしている

みんな、倉科さんを愛していた
倉科さんは、みんなに愛されていた

これで、どうすれば“平静を保”てるのだろうか？

そんな血も涙もでない人間に、人の最期を見送ることなんて出来ない。

まあ、結局そのチーフも先ほど裏方でびよおびよお泣いていたけれども。

昔、有名な海外女優がこんなことを言ったそうだ。

「私は生きている間、出来るだけ嫌われる存在になりたい。だって、もし私が死んだ時、出来るだけ多くの人が笑えるようになるでしょ」

もし。

もし、倉科さんがこの世からいなくなった瞬間、皆の記憶から倉科さんが消えてしまったら・・・

今、棺の前でうずくまっている人たちは、平然とした顔で街を歩いていたのだろうか・・・

この哀しみが、後に彼らにとって大きな糧になるとでもいうのだろうか

愛された人（後書き）

最後の方の「海外女優の言葉」ですが

昔何処かで聞いた（あるいは見た）気がするのですが
それが、何処で、誰が言ったのかわからないので、こづいづ形で
出させていただきました。

幸あれと。

彼女に、幸福が、訪れますように。

なんて、ちょっと良い子すぎたかしら？

* * *

長くなったやぼったい髪を後ろにかき集め、櫛を無造作に下へ下げ
る。

カー、カー、と、髪と櫛が織りなす音が狭い室内に響く。

安物のトリートメントを使っているので、時折髪と櫛は喧嘩を始め
る。

プチプチと、櫛に引っかかる音も交ざる。

ある程度“プチプチ”が無くなったら、その髪を一つにまとめ上げる
百均で買った花柄だけが特徴のシュシュを一つにした髪に絡ませ留
める。

と、そこでふと、思いとどまる。

殺害現場に髪の毛が落ちたら困る。

シュシュを髪から取り上げて、一つにした髪を上へとあげ、これも

百均であるピンで留める、留める、留める。

6つのピンを使い髪を二つ折りにした。

棚から取り出したシュシュは、せっかくだから腕に巻くことにした。
ちよっとしたお洒落だ。

* * *

彼女がいる男を寝取った？

やだ、もうちよつと言葉を選んでよ。恥ずかしいわ。
もちろん、わたしにも責任はあると思うの。

ほら、わたしってみるからに美人でしょう？

違うの、自慢とかそついうのじゃないの。

ただね、あの人 彼の彼女さんが、あまりに地味過ぎたの。
勝ち目がなかったのよ、可哀想に。

* * *

遠くから見ればポニーテールに見えるわたしの髪型は
近くで見るとただ無造作に二つ折りにしただけ。

チャイムを鳴らすと、出てきたのは、わたしが逢いたかった女。

憎く、憎く、憎い女。

嫌な顔をしながらも、部屋に通してくれるのは、女の優しさか。それさえも憎いのは、わたしの私情。

玄関の扉を閉めたのはわたし。
位置的にも、それが当然。

だから、ガチャリという音をたて、わたしは鍵をかけ、チェーンもかけた。

部屋に入るやいなや、わたしは女を持ってきた包丁で刺した。

女の背中はみるみるうちに朱く染まり、女はこちらを振り返る。

そう。

わたしは“その顔”が見たかったの。

* * *

寝取られた元彼女が可哀想ですって？

そんなことないわ。

いえ、絶対可哀想じゃないわ。絶対よ。

だって、あの女は　　。

* * *

崩れていく女。

必死の形相で最期の足掻きを始める。

足掻きはわたしのつま先をつかむだけで終わった。

人を殺した。

急によぎるその真実。

だけでもう遅いの。

* * *

わたしは、彼の、元彼女を、殺しました。

*
*
*

あの女は、絶対可哀想なんかじゃないわ。
だって、あの女は、まだ彼に愛されているんですもの。
だから、わたしはもうすぐ捨てられるわ。

元彼女に一言？そうね・・・

来世では
彼女に、幸福が、訪れますように。

なんて、ちょっと良い子すぎたかしら？

サボテン

きっかけなんて、ほんの些細なものだった。

* * *

作詞の仕事が終わって、久しぶりにつけるテレビ。

基本的に、作詞を依頼された期間は、テレビやラジオ、新聞などのメディアは一切見ない。

ただ、その曲だけに集中している。

なんてことない夕方のニュース番組。

少しませた女子アナウンサーが、今日の特集コーナーのタイトルを告げる

「今日の特集【ザ・ものしり!】テーマはこちらです!」

と、アナウンサーがカメラの前に差し出したのは、緑色の球体にとげとげがついている印象的な植物。

「そう、サボテンです!」

そこから画面がVTRに切り替わり、サボテンについて専門家が語ったり、サボテンを育てている家庭について紹介している映像になった。

「へー、サボテンってやっぱり水いるんやな。水無くても育つんやと思たわ」

一度興味を持つと、止まらない。
自分の性格は熟知しているつもりだ。

さっそく翌日、ホームセンターで小さなサボテンを買ってみた。

「い……いざ買ってみたけど……どうやって扱えばええんやろ……」

やっぱり目につくのは頭についているとげとげで、まだビニール袋から取り出せてすらいない。

「刺さったらどないしよう……毒とかないやろな……」

そんな、今思うと馬鹿げた独り言を呟きながら、なんとかトゲを回避しつつビニールからサボテンを取り出す。

ビニール袋から取り出し、全貌をあらわにしたこの植物。

よく見てみると、かわいい。

「……せや。名前付けな」

急に愛着がわいたので、“彼”に名前を付けてみる。

「サボテンやから

『サボ丸』なんてのはどうや？」

よく、「サボテンは人と心が通じる」なんて言うが、どうせ出鱈目だろう。

そう思っただけはいたものの、「サボ丸」と名前を呼んでみたら、どうも彼が嬉しそうにトゲを動かしているみたいでやっぱり、育ててみないとわからんこともあるんやなと思うことにした。

翌日、メンバーと雑誌のインタビューを受けることになっていたの
で、サボ丸も連れて行くことにした。

「わあ、サボテン買ったんですか！」

先にリアクションを示したのは、ボーカルの年下の女の子だった。

「へえ、かなりミニサイズですね。サボテンってもつとずしいーつと重たいもんかと思ってましたよ」

そう言うのは、これまた年下のギターの男の子。

「サボテンって育てるの大変みたいですけど、この人にかかればあつというまに大きくしてくれそうですね」
そう笑いをさそうのはグループのリーダー。

一昨日やっていた作詞の仕事は、このグループの楽曲の作詞だった。

今日のインタビュアーは、来月発売するシングルについてのインタビュアーだった。

適当にインタビュアーを受けていると、インタビュアーがサボテンに目をとめた

「かわいらしいサボテンですね。これは誰が育てていらっしやるんですか？」

「かわいいでしょう？サボ丸言っんです」
即答すると、メンバーがくすくす笑う声が聞こえる。

「なんや？かわいいやろ？」

「いや、そうなんですけど・・・なんかお母さんが自分の息子褒められて喜んでるみたいでおかしくって」

「サボ丸はうちの子や。あんたらには手え出させへんで」

「誰も出しませんよー、だってトゲ刺さるじゃないですかあ」

ギターの子のこの発言で、インタビュアーが多いに吹いた。きつとICレコーダーにも盛大に録音されたことだろう。

ご愁傷様　とサボ丸と一緒に小さく手をあわせておいた。

* * *

この頃は、サボ丸について夢中で、とうとうサボ丸を思った曲まで出来てしまった。

タイトルは『声』。

主人公からの相手への“声”はいくら叫んでも届くのに

どうして相手からの返事の“声”は来ないのだろう　　といった

歌詞の内容だが

これは自分とサボ丸のことだ。

こちらから何度サボ丸に求愛をしても

彼が声をかけてくれることはない。

たとえ嬉しそうに揺れているとしても、錯覚ととってしまえばそれまでだ。

「あんたに口ついとつたらええのになあ」

なんて独り言は、サボ丸にしか聞かせられない。

今度『声』についての雑誌のインタビューがあるがサボ丸を元に作詞をしたと答えたら、またメンバーに笑われるのだろうか・・・
それでも、なんだか幸せな気分になれそうなのは、サボ丸と一緒にいるからだろう。

* * *

きっかけなんて、ほんの些細なものだった。

きっかけなんて、ほんの些細なものだった。

『声』の宣伝も終わり、今は少しのお休みを貰っている。

窓から来る風に酔いしれながら、椅子にすわってうたたねをしていたお昼時。

つけっぱなしのテレビから流れてきたのは、ある一本のニュースだった。

「工国特別博物館から盗難され、先日発見された名画『神をたたえる少女』が、本日より公開されることになりました」

「な・・・なんやて!？」

以前I国に旅行に行ったとき、I国特別博物館にあった、あるスペース。

そこには数年前盗まれた『神をたたえる少女』が飾られていたそう
だ。

I国特別博物館はパンフレットを作っておらず、館内の撮影も禁止
なので、絵が見たかったら直接足を運ぶしかない。

つまり『神をたたえる少女』を見るにはその博物館に行くしか術は
なかった。

その名画が、ようやく発見され、またあの博物館に戻ることになる。
本来なら、それが贋作かどうかの調査があるのだが、ようやく現れ
た名画に国民もまだかまだかと博物館に押しかけるようになり、と
うとう名画の期間限定の公開を政府が決めたそうだ。

この機会を逃したら、鑑定がはじまり、次はいつ公開
になるかわからない。

ちょうど今は、新曲の営業も終わり、何も自分を縛るものはない。

I国に行くための弊害は何一つなかったのだ。

すぐにタンスから必要な衣類を引っ張り出し、化粧品やらパスポ
トやらを旅行用カバンにつめこんで、飛行機のチケットをゲットし、
マネージャーにメールで

- 旅に出ます。探さんといて！ -

いつものように打ち、外に出るまでに1時間はかからなかった。

* * *

外に出るまでには1時間とかからなかったのに、帰国し家に帰るまでには1週間かかった。

工国特別博物館での絵画鑑賞を楽しみ、一泊し帰ろうとした矢先、空港でストライキが起こったのだ。

夜になってそれは治まることを知らず、結局1週間の長旅となってしまった。

「ま、絵も見られたし、良い生地 of 服も買えたし、ええうちゅーことにしとくか」

そう呟きながら、ドアを開ける。

信じられないことに。

ドアを開けるその寸でのところまで、忘れていた。

「嘘、やる・・・？」

日に日に大きくなっていったサボ丸は、見るも無惨にぺっしやんに枯れてしまっていた。

いつもゆらゆらと揺らしていたトゲはすべて下を向き、丸い球体ももはや底辺にまで落ちてている。

「な・・・なんで・・・」

なんで、誰かに世話を頼むことをしなかったのだろうか？

なんで、ベランダから出してあげなかったのだろうか？

なんで、今まで大切に育てていた彼の存在を忘れていたのだろうか？

あんなに、あんなに一生懸命育てた彼の事を一時のニュースによって忘れてしまった自分が情けなくて、情けなくて、一週間前の自分にひどく殺意がわいた。

つぶれたサボ丸をよくよく見てみると、ピンク色の花紙のようなものがくっついてる。

枯れる直前、花が咲いたのだろう。

最期に

最期に飼い主に、自らの有終の美を見せたくて、最後の力をふりしぼって咲かせたのかもしれない。

そう思うのと、涙がぼろぼろ零れ出すのは同時だった。

「ごめん・・・ごめんなあ、サボ丸・・・」

そっと、頭を撫でてみる。

もう、いつもみたいに“返事”は聞こえない

本当に、彼の“声”は失われてしまった。

気休めだと　自己満足だとわかってはいても、水をあげられずにはいられなかった。

水を一定の量あげた後、その日は、そのままサボ丸に寄り添う形に、床で眠ってしまった。

翌日、目を開くと、眼球いっぱい、ピンク色が広がっていた。
ピントを合わせると、ピンク色を作っていたのは他でもない
サボ丸だ。

「えっ……!?!」

目をぎょぎょとこすり、もう一度サボ丸をしてみる。

1週間前のまん丸とはいかないものの、少し丸みを帯びた植物が、
一生懸命にピンク色の花を咲き誇らせているのが見えた。

“まるで、飼い主に有終の美を ”

「許してくれるん……?うちの」と……。見捨ててしまたんや
で……?」

彼はいつものように、ゆらゆらと、その楕円の頭を揺らした気がし

た。

だから、いつものようにその頭を撫でてやることにした。

サボテン（後書き）

まあ・・・わかる人にはわかると思っていますが・・・主人公のモチ
ーフは某深紅の烏の美人作詞家さんです。笑

きっかけはガネ友さんとの「あの人ってサボテン飼ってそうだよ
ねー」って会話からです。

じ、実際の作詞家さんはサボテン枯らすようなことはしないと思
います！あくまで、あくまでフィクションですから！！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6004o/>

テキスト集

2012年1月4日02時48分発行